

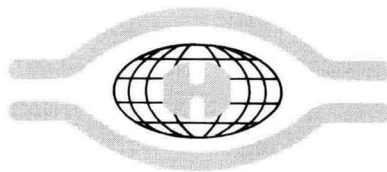
HEIBON
SHA'S
WORLD
ENCYCLO
PEDIA

世界
大百科
事典

8

キラーケン

平凡社



世界大百科事典 8

1981年4月20日 初版発行
1982年印刷
全36巻揃現金定価 145,000円

編集兼発行人 下中邦彦

発行所 平凡社

郵便番号102
東京都千代田区三番町5
振替東京8-29639番
電話03(265)0451番

本文用紙	十条製紙株式会社
グラビア用紙	山陽国策パルプ株式会社
多色オフ用紙	
見返用紙	日清紡績株式会社

本文写植製版	フォト印刷株式会社
本文印刷	株式会社東京印書館
グラビア製版印刷	株式会社東京印書館
多色オフ	株式会社光村原色版印刷所

クロース	ダイニック株式会社
表紙箔押	斎藤商会
製本	和田製本工業株式会社

●見出しのつけ方●

《表音見出し》

1. 日本読みのもは〈現代かなづかい〉による〈ひらがな〉書きとし、促音・拗音は小字とした。ただし、お列長音は〈う〉、〈ち・づ〉は〈じ・ず〉とした。
2. 外国読みのもは、外来語を含めて〈カタカナ〉書きとし、長音は〈音びき〉(一)を用いた。略語は、とくに原語読みの普及しているもののほかは英語読みに従った。
3. 中国・朝鮮などの人名・地名は、慣用の漢字読みで出したが、現地読みに近い慣用読みのあるものはそれによった。
4. 日本語と外来語との合成語は、日本語の部分は〈ひらがな〉、その他は〈カタカナ〉とした。

《本見出し》

1. 日本読みのもは、〈漢字〉と〈ひらがな〉を用いた。〈ひらがな〉書きのもので、表音見出しとまったく一致するものは省略した。
2. 外国読みの項目には、原則として原語(あるいは語原を示す語)を入れた。ただし、ギリシア語、ロシア語その他、特殊な文字のもはローマ字におきかえて入れた。
3. 日本読みと外国読みとの合成したものは、〈漢字〉〈ひらがな〉〈カタカナ〉をあわせ用いた。

《項目配列の方法》

1. 表音見出しの五十音順とし、促音・拗音も音順にかぞえ、清音、濁音、半濁音の順序とした。
2. 〈音びき〉(一)のあるものは〈音びき〉のないものの後にした。
3. 同音のものは、おおよそつぎのような順序で配列した。
 - a. 表音見出しの〈カタカナ〉→〈ひらがな〉。
 - b. 本見出しのないもの→〈カタカナ〉のもの→〈ひらがな〉のもの→漢字のもの。
 - c. 本見出しが漢字のもは、第1字目の画数の少ないものを先にし、第1字目が同字のものは順次第2字以降の画数による。
 - d. 同音同字のものでは、普通名詞→固有名詞。
 - e. 外国人名では、ファミリー・ネーム(同一の場合はパーソナル・ネーム)のアルファベット順。
 - f. 日本地名では、自然地名→行政地名→その他の地名。

●文体と用語・用字●

1. 漢字まじり〈ひらがな〉口語文とし、かなづかいはおおむね〈現代かなづかい〉に従い、漢字は原則として当用漢字を用いた。ただし、原典の引用、固有名詞、歴史的用語その他は例外として扱い、必要に応じて()内に読みがなをつけた。
2. 動・植物名、元素名、化合物名、鉱物名で当用漢字のないもの、日本神名および〈カタカナ〉を慣用としている特殊の語は〈カタカナ〉書きとした。
3. 年代は、原則として西洋紀年を用い、必要に応じて日本・中国その他の暦年をつけた。
4. 度量衡は、原則としてメートル法を用いたが、慣用に従って尺貫法、ヤード・ポンド法を用いた場合もある。

●外国語について●

1. 欧文の地名・人名については、可能な限り現地読みに近いものをつけたが、慣用の読み方に従って例外としたものも少なくない。
2. ギリシア語、ロシア語のローマ字へのおきかえはつぎのようにした。
 - a. ギリシア語
η=e ω=o x=k χ=ch
 - b. ロシア語
a=a б=b в=v г=g д=d
e=e ё=yo ж=zh з=z и=i
й=i к=k л=l м=m н=n
o=o п=p р=r c=s т=t
y=u ф=f x=kh ц=ts ч=ch
ш=sh щ=shch ъ=' ы=y
ь=' э=e ю=yu я=ya
3. 上記のほか、欧文の地名・人名の〈カタカナ〉による表記は、おおむねつぎの基準に従った。

berg[スウェーデン]〈ベリー〉 Strindberg ストリンダベリー
cu[スペイン]〈クァ・キ・クエ・クォ〉 Ecuador エクアドル
d[独]語末では〈ト〉 Wieland ヴィーラント
de[仏]〈ド〉 de Gaulle ド・ゴール
dou[仏]〈ドゥー〉 Doumer ドゥーメル
du[英・仏]〈デュ〉 Durand デュラン
ド; Dumas デュマ
du[独]〈ドゥ〉 Durst ドゥルスト
er[英・独]語末では〈アー〉 Parker パーカー; Herder ヘルダー
g[独]語末では〈ク〉, ngは〈ング〉, igは〈イヒ〉 Hamburg ハンブルク;
Lessing レッシング; König ケーニヒ
gn[仏・伊・スペイン]〈ニャ・ニュ・ニエ・ニョ〉 Auvergne オーヴェルニュ;
Bologna ボローニャ

gu[伊・スペイン]〈グァ・グィ・グェ・グォ〉 Paraguay パラグアイ
ia[一般]語末では〈イア〉 Asia アジア
io[伊]〈ヨ〉(拗音) Boccaccio ボッカッチョ; Giorgione ジョルジョーネ
j[スペイン]〈ハ行音〉 Juárez フアレス
je[一般]〈イェ〉 Jena イェーナ
ley[英]〈リー〉 Huxley ハクスリー
ll[スペイン]〈リャ・リョ〉, 南アメリカでは〈ヤ・ヨ〉 Castilla カスティリャ; Trujillo トルヒョ
oi, oy[仏]〈オワ〉 Boileau ボワロー
pf[独]〈プ〉 Pfitzner ピッツナー
ph[ギリシア]〈フ〉 Aristophanes アリストファネス
qu[伊・ラテン]〈クァ・クィ・クエ・クォ〉 Quirinius クィリニウス
ray[英]〈レー〉 Thackeray サッカーレー
son[英]〈ソン〉 Edison エディソン
sp, st[独]語頭では〈シュプ・シュト〉 Spranger シュプランガー; Storm シュトルム
stew, stu[英]〈スチュ〉 Stewart スチュアート; Stuart スチュアート
swi[英]〈スウィ〉 Swift スウィフト
thi, ti[一般]〈ティ〉 Thiers ティエール; Tiziano ティツィアーノ
thu, tu[独・ラテン]〈トゥ〉 Tumlirz トゥムリルツ; Tacitus タキトゥス
thü, tü[独]〈チュ〉 Thurnau チュルナウ
tou[仏]〈トゥー〉 Toulon トゥーロン
tu[英・仏]〈チュ〉 Tunisia チュニジア
v[ラテン]〈ウ〉 Vergilius ウェルギリウス
v[スペイン]〈バ行音〉 Verasquez ベラスケス
w[独]〈ヴ〉 Wagner ヴァーグナー
x[一般]〈クス〉 Xenophon クセノフオン
y[ギリシア]〈ユ〉(拗音) Dionysos デイオニッソス
zi[独]〈チ〉 Leipzig ライプチヒ; ただし語頭では〈ツィ〉 Zimmermann ツインマーマン
zi[伊]〈ツィ〉 Venezia ヴェネツィア
zü[独]〈チュ〉 Zürich チューリヒ

●符号・記号●

《かこみと送り》

- 【 】 中見出し語をかこむ。
〔 〕 〈本見出し〉に出る動・植物の漢字および本文中の小見出し語をかこむ。
〈 〉 書名または題名をかこむ。

- < > 引用文または語句、とくに注意をうながす語、書名または題名以外の編または章などの表題をかこむ。
 () 注の類、または読みがなをかこむ。
 [] 日本地名の国・県・区・市・町・村をかこむ。
 ⇨ 該当項目への送り
 ⇨ 参照項目への送り

《漢字略語》

国名・地名の略語を用いる場合は、つぎの13種にかぎって使用する。

アメリカ(米); イギリス(英); イタリア(伊); インド(印); オーストラリア(豪); オランダ(蘭); ソヴェト(ソ); 中国(中); ドイツ(独); 日本(日); フランス(仏); モンゴル(蒙); ヨーロッパ(欧)

ただし、戦争、会議、協定など特定の場
 合にかぎって

アジア(亜); アフリカ(阿); オースト
 リア(奥); トルコ(土); プロイセン
 (普); ロシア(露)

などの略語も用いる。

《科学記号または略符号》

a	アール
A	アンペア
Å	オングストローム (=10 ⁻⁷ mm)
A. D.	紀元後
atm	気圧
Aufl.	版
[α] _D ²⁰	比旋光度(20℃における ナトリウム D線に対し)
B.	湾
bar	バール
B. C.	紀元前
Bé	ボーメ度
BTU	英熱量
c	サイクル
C.	岬
℃	摂氏温度
ca.	年数の大略を示す。
cal	カロリー
Cal	大カロリー
cgs	絶対単位
cm	センチメートル(cm ² 平方 センチ, cm ³ 立方センチ)
const	定数
d	デシ(=1/10)
d ¹⁵	比重(15℃における)
d-	右旋
D.	砂漠
dB	デシベル
deg	度(温度)
dyn, dyne	ダイン
E	東経
emu	電磁単位
eV	電子ボルト

F	ファラッド
°F	華氏温度
ft	フィート(ft ² 平方フィー ト, ft ³ 立方フィート)
g	グラム
G	ギガ(=10 ⁹)
G.	湾
gwt	グラム重
h	時
ha	ヘクタール
HP	馬力
Hz	ヘルツ
in	インチ(in ² 平方インチ, in ³ 立方インチ)
I.	島
Is.	諸島(列島)
IU	国際単位
k	キロ(=10 ³)
K	絶対温度
ke	キロサイクル
kcal	キロカロリー
kg	キログラム
km	キロメートル(km ² 平方キ ロ)
kV	キロボルト
kW	キロワット
kWh	キロワット時
l	リットル
l-	左旋
L.	湖
lb	ポンド
lm	ルーメン
l. t	ロング・トン
lx	ルクス
m	メートルまたは分
m-	メタ
M	メガ(=10 ⁶)
Mc	メガサイクル
mb	ミリバール
mg	ミリグラム
mks	mks単位
mm	ミリメートル

mmHg	水銀柱の高さ(mm)
mol	モル
Mt.	山
Mts.	山脈, 山地
mμ	ミリミクロン(=10 ⁻⁹ m)
μ	ミクロまたはマイク (=10 ⁻⁶)
μ	ミクロンまたはミュー (=10 ⁻⁶ m)
μμ	ミクロミクロンまたはミ ューミュー(=10 ⁻¹² m), ただしmμをμμとも記す。 ナノ(=10 ⁻⁹)
n	屈折率(15℃におけるナ トリウム D線に対し)
n _D ¹⁵	規定, または北緯
N	号, または番
Nr.	オルト
o-	オンス
oz	ピコ(=10 ⁻¹²)
p	パラ
p-	半島
P.	水素イオン濃度指数
pH	ビーピーエム(=10 ⁻⁶)
ppm	メートル馬力
PS	川
R.	1分(時)(秒)間回転数
rpm(h)(s)	南緯
S	海
S.	秒
sまたはsec	ショート・トン
s. t	海峡
St.	トン
t	ボルト
V	ワット, または西経
W	オーム
Ω	生没年などの年数の両説 を示す。
/	パーセント
%	パーミル
‰	雄
♂	雌
♀	

《地図記号》

記 号	各 国 地 図	分 県 地 図
	国境	県境
	省・州・県境	
	鉄道	国鉄
	特殊軌道	私鉄
	運河	特殊軌道
	主要道路	国道
		鉄道連絡線航路
	パイプライン	
	首都	都道府県庁所在地
	主都(省・州・県)	市
	大都市	
	中都市	町
	小都市・町, その他	村・字, その他
	山頂	山頂
	峠	峠

注 その他慣用化している記号は適宜使用した

別刷図版目次

ギリシア美術	29～34
キリシタン文化	43～44
霧島屋久国立公園	53～54
キリスト教美術	71～72
金魚	121～122
金属工芸	155～156
近代建築	173～176
空港	257～260
くだもの	325～328
熊本	393～394
雲	411～414
グリュネヴァルト	479～480
クールベ	497～498
クレー	507～508
グレコ	517～518
グロテスク	551～552
グロピウス	569～570
群馬	619～620

きら 吉良〔町〕 愛知県南部、幡豆（はず）郡の町。1955年吉田町と横須賀村が合体、改称。人口19,093（1970調）。有名な〈忠臣蔵〉の吉良領である。1945年1月の大震災では旧形原町（蒲郡市）とともに被害核心地となり人家50%あまりが倒れた。旧横須賀村はかつては三河もめんの産地として知られ、1878年（明治11）矢作古川（やはきふるかわ）の水流を利用して、ガラ紡の前身である舟紡績を創始したところとして名高く、現在では食品化学工業もある。吉田は一色町とともに15世紀の新田開発によって起り、海岸部では製塩も行われていたが、1971年12月塩田は閉鎖された。（伊藤 郷平）

キラー Killer ゴウリムシ *Paramoecium aurelia* の系統-4（数字4は系統を分類する上の記号）は、自己の培養液中に、他系統のゴウリムシを殺す物質であるところのカッパー粒子を放出するので、キラーと呼ばれる（ゾンネボーン T. M. Sonneborn, 1948）。強いキラは体内に450～1,600個のカッパー粒子をもっており、遺伝子型はKKである。遺伝子型がヘテロすなわちKkのものは弱いキラーで、含むカッパー粒子の数も少ない。カッパー粒子は、遺伝子Kをもつ個体では細胞質中で自己増殖を行うことができ、K遺伝子はカッパー粒子の増殖には必要であるが、この粒子を新生することはできない。ヘテロ個体（Kk）を栄養条件のよい培養液で飼って分裂速度を速めると（普通は1日に3～4回分裂）、カッパー粒子の増殖がまにあわず、だんだんカッパー粒子の数の少ない個体ができ、ついにはカッパー粒子をもたない個体ができる。この個体は遺伝子型はKkであるが、カッパー粒子を含まず、感受性となり、他のキラー系統の培養液によって殺される。普通の感受性ゴウリムシの遺伝子型はkkで、カッパー粒子をもっていないが、遺伝子突然変異によってK=kが起るので、KK=Kk=kkの変化によって、通例、遺伝子突然変異が起ってから10数回の分裂後に表現型が、（キラ）=（感受性）と変わる。また遺伝子型がkk→Kkと変わっても、Kはカッパー粒子をつくりえないのでキラーではないが、カッパー粒子をもつ個体と短時間接触すると伝染してカッパー粒子を受け取り、これが自己増殖してキラーに変わる（ゾンネボーン, 1955）。カッパー粒子は直径約0.2～0.5μmの微粒子で、デオキシリボ核タンパクで、ビールスに似ており、突然変異もする。カッパー粒子は寄生または共生微生物、もしくはビールス（伝染性）であると考えられる。（田中 信徳）

きらい 機雷 機械水雷の略称。鋼板製のかんに爆薬を装入して起爆装置をもたせ、適度の浮力を与えて水中に沈め艦船が接触または接近すれば爆発して損傷を与える兵器。敷設方式により係留機雷、浮遊機雷および感應機雷に大別されるほか、着火方式や用法により種々に分類される。

〔種類〕（1）視発水雷 最も単純な機構で、敷設位置に敵艦が接近したときに陸上監視所から照準して電気着火により爆発させるもの。浅海で潮流の強い所では

海底につないで海底水雷とし、深海で潮流がゆるやかな所では浮漂水雷とする。もっぱら港湾の防御用でその特殊目的以外には現在のはほとんど使用されない。これと似たものに電気触発水雷がある。これは敵艦が衝突すれば爆発するが、電源回路の操作は監視所で敵味方を識別の上行う。（2）角式機械水雷 発火用の電池をかんの中に自蔵するもので、外部に数本の角（つ）のをもち、艦船がこれに衝突すると角が折れて内部のガラスびんがこわれ薬液が流出して電池の極板に作用し電流回路を形成して爆発する。現用の港湾封鎖や海域翼面封鎖用の係留機雷として代表的な機雷である。深度不明の海中に投入しても水面下の所要深度に係留索の長さが自動的に調整される自動係留器をもっている。この種の機雷には、2個を索で連結して艦船が索にひっかかって引きずる時に1個または2個が玄側に衝突して爆発する連係機雷や、1個の機雷が爆発または掃海されると、他の1個が海底係留部から上昇して必要位置をとる〈2重機雷〉としての用法もある。（3）浮遊機雷 敵艦が必ず通過すると判断される海域、港湾あるいは河川上流から敵領土の downstream にむかって敷設するもので、係留索をもたず浮子をもつ。また圧縮空気と水圧および電池の組合せで浮力を自動調整するものもある。普通は球形であるが、潮流の強い海流で使用するものは、海流圧による沈降をふせぐため特殊の外形をもつものがあり、〈潮流機雷〉という。（4）感應機雷 磁気、音響、水圧などを利用して艦船の接近に物理的に感應して、接触しなくても爆発するもので、〈磁気機雷〉が代表的である。磁気機雷は信管の型によって磁針型と誘導型に区別される。磁針型は艦船の接近によって生ずる磁場の垂直分布の変化にともなっておこる誘導電流の変化を増幅して起爆リレーを作動、爆発する。誘導型磁気信管は誘導コイルを機雷かんの長軸方向に平行に設けて、水平磁場の変化に対してのみ起爆リレーが作動するもので、磁針型に比して感度は劣るが、10秒以上の間隔で正負方向を異にする磁場変化がなければ起爆せず、また磁場変化が8～10回に達するまで起爆作動がはじまらないような回数起爆装置をつけるという特徴をもっている。第二次世界大戦中アメリカ軍が日本近海に投下したM9、M11型などはその例で、防御が困難である。これらの感應機雷は潜水艦や飛行機によって通常の機雷に比し深部に敷設され、艦船が接近すると船底付近まで浮上して爆発する機構をもっている。

〔機雷防御法〕係留機雷は防雷掃海具で除去するが、対艦掃海法と単艦掃海法に大別される。対艦掃海は掃海索を2～3隻の艦艇で引航し機雷索をつりあげて処分する。単艦掃海は掃海索沈降器と展開器（パラベーン）からなる掃海具を使用する。艦首から引索すれば翼をもつ展開器が水中を飛行機状に進行してハの字状に両玄に開く。機雷索は特殊な刃をもつブリパンド掃海具に触れて切断されるか、展開器の刃（圧縮空気駆動）で切断する。磁気機雷のうち磁針型は大形コイルに電流を通じて艦艇で引航し垂直磁力の分布を変化させて起爆させる。誘導型は1辺

40～60mの四辺形コイルを浮子で海中の一定深度に沈め、数秒ごとにコイル電流の方向を変えてコイルの対角線方向に引航して起爆させる。

〔機雷戦術の変遷〕水中爆発兵器の起源は1585年、アントワープのスヘルデ橋爆破のためイタリアのランベリーが火舟を考案、成功したことに始まるが、アメリカ独立戦争に際しブッシュネル大尉が海中水雷を考案して実用化研究が進み、さらに1842年コルトが水雷用電気発火器を発明、兵器として急速に進歩した。実戦では幾多の失敗を重ねたが1862年のアメリカ南北戦争にいたり北軍艦艇2隻が撃沈破され、また日露戦争でようやく敷設水雷の威力が認められた。すなわち日本は軍艦〈初瀬〉〈八島〉その他合計14隻を失い、ロシアは戦艦ペトロパヴロフスクなど13隻が機雷により撃沈破された。当時の装入さく薬量は小形では30kg、大形300kgにおよび、50m間隔に毎分20個の速さで敷設された。第一次世界大戦中にはドイツ潜水艦の活動を封殺するため連合軍は北海に機雷ぜきを設置して航行を遮断したが、東ベルゲン港からスコットランド東方オークニー諸島まで長さ420km、幅は3段で24～56km、水深2～75mに設置した機雷数は205,000個、ケーブルの長さ6万kmに達し、戦争期間中の機雷製造数はイギリスで300,000個、アメリカで82,000個に対し、ドイツでは総数600,000個に及んだ。第二次世界大戦では防衛的用法よりも攻撃用法が進歩し、感應機雷（磁気、音響、水圧の各方式）を混用して敵の防御手段を混乱させる方式が採用されるようになり、飛行機、潜水艦による敷設がさかんとなり航路の妨害、遮断が行われた。（林 克也）

きらい 儀礼 中国の経書の一つ。現在17編がのこっているが、もと57編あったと伝えられる。伝統的には周公の作といわれるが、もちろんもっと後世のものである。むかしは〈礼経〉といったが、儀式の記録であるところから〈儀礼〉ともいわれた。内容は冠婚葬祭をはじめ中国古代社会における社会的儀式を詳しく記録したもので、古代生活の宗教学的・社会学的研究にとってひじょうに貴重な資料とされている。（加藤 常賢）

キラウエア Kilauea ハワイ諸島の南端にあるハワイ島の東端、ヒロ市の南東約50km、マウナ・ロア火山の南東側にある活火山。主としてソレアイト質カンラン石玄武岩の溶岩流からなる。山頂のカルデラから東方と南西方に裂け目帯が延びており、これに沿って噴火が繰り返されて山体が成長したため、東西方向に延びたきわめて扁平な楕（た）状の火山体をつくりあげている。標高1,222m。すぐ北と西に接していっそう高大なマウナ・ロアの山腹がつづき、東と南の山腹はゆるやかに下って20km以上もへだたる海岸に達している。平坦で高原状をなす山頂部には、裂け目帯に沿って割れ目や小火口および小寄生火口丘が多数みられ、これらが鎖状に連なって中腹まで延びているところもある。キラウエアの名を世界的に有名にしているのは頂上のカルデラである。これは長径4km、短径3.2km、

深さ約120mの楕円形の陥没カルデラで、その底の南西端近くに高さ100～200mの絶壁に囲まれたハレマウマウ Halemaumau と呼ぶ火口(直径約295m)がある。カルデラの壁には火山観測所および観光客のための旅館があり、また、この付近一帯はマウナ・ロアとともにハワイ火山国立公園に指定されている。(佐藤 久)

キラウェア火山は1823年最初の地学的調査が行われて以来ほとんど連続的に活動を続けている。1924年までは、1894～1907年の期間以外は、ハレマウマウ火口内にはいつも赤熱の溶岩湖ができていた。1924年の爆発的噴火以後消滅し、最近では活動時にだけ小規模な溶岩湖が現われるだけになった。噴火はこのハレマウマウ火口を中心にして起り、溶岩が火口からあふれ出してカルデラ底にひろがることもしばしばある(1919、1921年の噴火など)。まれには山腹の裂け目帯上で噴火が起り、大量の溶岩流が山腹にひろがることもある。現在までに起った近年の噴火の最大のもは、1840年東側の裂け目帯上で起ったもので、約0.2km³の溶岩流が流れ出し、耕地に多くの被害を出した。今世紀では、1919年、52年、55年、59年、60年に大規模な噴火が起っている。1955年の噴火は東側の裂け目帯上に起り、約0.09km³の溶岩流を流出した。1959年の噴火は山頂東側のキラウェア・イキで起った(溶岩流約0.06km³)。翌1960年には再び東側裂け目帯上で噴火が起り、約0.1km³に及ぶ大量の溶岩が流出して、耕地や建物に多くの被害を出した。これらの噴火活動は、いずれも粘性の低い高温の溶岩の流出を主とする比較的穏やかなものであるが、ごくまれには爆発的噴火(1790年と1924年)が起ることがある。

(村井 勇)

きらかわ 吉良川 ♪室戸(むろと)[市]

きらこうずけのすけ 吉良上野介

♪吉良義央(よしなか)

きらこうよう 雲英晃耀 1831～1910 明治時代の真宗大谷派の学僧。愛知県幡豆郡一色村(現、一色町)安休寺の住持であった。子どものころ、同郡源徳寺の住持本法院義譲について学び、16歳で京都の高倉学寮にはいった。自宗の宗学に通ずることはもとよりであったが、他宗の学としては、その師義譲とおなじく、俱舎(くしゃ)、唯識、因明(いんみょう)などのようないわゆる性相学にくわしく、

ことにインドの論理学といわれる因明の研究に力をそぎ、重要な業績をのこしている。彼は司法省、華族会館などで『因明要義』を講じ、また朝野の名士と結んで因明学会を設けているが、それは彼が新しい言論時代に対処するためであった。村上专精の因明学は彼の門から出たものである。因明に関する数々の著述のうち、『冠註因明入正理論疏』6巻は、『因明大疏』の誤字を正し、冠註をほどこした功労の書、『入正理論方隅録』13巻は、難解の疏を文々句々注釈した力作である。初心者には『因明活眼』2巻、『因明初步』などがある。(結城 令聞)

きらし 吉良氏 鎌倉時代以来の武家。鎌倉時代の初期足利義氏は九条家領三河国幡豆郡吉良庄の地頭となり、それ以後庶長子長氏は西条に、三男義継は東条に住居し、ともに吉良氏を名のった。長氏の子満氏は聖一國師に師事し、文永のころ西尾の実相寺巨海の願成教寺建造の外護となった。南北朝の乱に満氏は足利義詮に属して功をたて、評定衆(ひょうじょうしゅう)に列して引付頭人を勤めた。その弟尊義は東条に住んでいたが、所領



を兄と争い、これに端を発して吉良氏は東西に分れて戦国期に至った。その間吉良氏は將軍の相伴衆(しょうばんしゅう)として多く在国しなかった。義堯の嫡子義郷が早世の後をうけて三男義昭が西条を継ぎ、次男義安は東条の養嗣子となったが織田氏に通じたため今川氏によって駿河に移され、義昭が義元の後援を得て東西吉良を領した。1561年(永禄4)義昭は松平の将酒井正親に居城東条を攻められ降人となったため、義安は今川氏より東西吉良兼帯を認められ、この今川氏真が滅んで三河にもどり、子義定とともに徳川家康に従った。なお義昭は岡崎幽居中、63年三河一向一揆(いっこういっき)に荷担し東条に兵をあげたが翌年没落した。義冬は1617年(元和3)徳川秀忠より故地の一部横須賀など7ヵ村3千2百石の安堵(あんど)状をうけ高家(こうけ)となったが、義央(よしなか)の代に至って1702年(元禄15)、赤穂浪士によってその亡主浅野長矩(ながのり)の仇(あだ)として討たれた。家名断絶後弟義叙に家宝が伝えられ、孫義孚の時東条氏を吉良氏に改め名跡を復して明治維新に至った。なお義継の玄孫貞家およびその子満家は南北朝に四本松において奥州探題に任ぜられ、のち関東管領(かんれい)家の重臣となり、江戸時代蒔田氏となって幕府に仕えた。

その他吉良氏を称するものに土佐吉良

氏がある。これは源頼朝の同母弟義義の次子希望が吾川郡吉良庄を頼朝から与えられたものの子孫であるが、長曾我部元親に滅ばされた。(菊地 武雄)

キラファットうんどう キラファット運動 1919年インドのイスラム教徒によって始められたトルコのカリフ擁護の運動で、キラファット Khilafat とはカリフ Kalif より転じたもので、正しくはキラファット Khilafat 運動という。インド民族運動史上、国民会議派とイスラム教徒との反英協力の時期として重大な意味をもつ。インドのイスラム教徒は1906年アガ・ハーンの指導下に全インド・ムスリム連盟を結成し、会議派に対抗して対英協調とイスラム教徒の利益擁護とを看板としたが、12年アリガル大学問題をめぐってイギリス政府と対立し、13年には自治政府樹立を決議して会議派に近づくとともに、指導権はモハンメッド・アリー、ショーカット・アリー兄弟に移った。彼らは若い急進的民族主義者であり、この運動の組織者となった。ムガル帝国没落後、インドのイスラム教徒の信仰の中心は汎イスラム主義の影響もあって、トルコのカリフに向けられていたが、当時のトルコをめぐる国際紛争は彼らのカリフに対する同情と支持とを高め、ことに第一次世界大戦中のイギリスの対トルコ政策、およびカリフのインドのイスラム教徒へのジハード(聖戦)参加の要請は、キラファット運動を反英運動として民族運動の中に位置づける契機となった。大戦中イギリスは戦後自治を許すことを公約してインド人の協力を得たが、公約実行を要求して高まった戦後の民族運動に対し、ローラット法公布など一連の弾圧策をもってこれに臨んだ。1920年会議派はガンディの指導下に非暴力不服従戦術を採用し、抗英運動を強化したが、連盟の指導者は彼の協力の下にキラファット委員会をボンベイに組織し、これは全国に拡大された。インドのイスラム教徒の対連合国要求は、トルコの主権の確保とカリフの地位の保証とにあり、セーヴル条約締結はこの運動を頂点に導いた。しかるに、22年チャウリ・チャウラ事件(連合州チャウリ・チャウラにおける農民の警察署襲撃事件)を機とするガンディの抗英運動停止の指令は、民族運動に停滞と挫折(させつ)とをきたし、ヒンドゥー、イスラム両教徒の分裂をも導いた。23年ころより各地に起った宗派間の紛争にも、会議派は適切な策をとりえなかった。一方キラファット運動そのものも、ケマル・アタチュルクの改革によるカリフ制度の廃止の前にその実践的意義を失った。24年連盟はシンナーの下に改組され、ふたたびイスラム教徒の利益のみを代表することとなり、会議派内部からのヒンドゥー・マハサバの出現もあって、この後両教徒は対立し合う関係となった。

(高畠 稔)

きらよしなか 吉良義央 1641～1702 江戸時代中期の幕臣。三河東条の吉良氏の末で、高家(こうけ)の家柄。父は若狭守義冬、母は大老酒井忠勝の弟忠吉の娘。1657年(明暦3)従四位下侍從に叙任し、上野介と称し、68年(寛文8)父の遺領をつぎ吉良庄4千石を知行した。上杉定勝

《切られ与三》 1963年歌舞伎座の舞台より(11世市川团十郎の与三郎、6世中村歌右衛門のお富、13世中村勘三郎の編蝠安)



の娘を妻とし、子の綱憲は養子となって上杉家をつぐなど、姻戚に名家が多く、天皇の即位や将軍宣下などに際して数度京都に上り、礼式に精通して幕府で重んじられたが、ごうまんな性格のため1701年(元禄14)浅野長矩(ながのり)の傷害にあい、ついに赤穂浪士の討入によって殺された。養子義周(よしちか)はその際の処置をとがめられて、家は断絶したが、のち分家によって再興した。→赤穂浪士討入 (尾藤 正英)

きられよさ 切られ与三 歌舞伎(かぶき)世話狂言《世話情浮名横櫓(よわなさけうきのよこぐし)》の主人公の呼び名で、またその狂言の俗称。狂言は3世瀬川如皐(じょこう)の代表作。長唄(ながうた)の4世芳村伊三郎が素人(しろうと)のとき、木更津に遊び、土地の博奕打(ばくちうち)の妾(めかけ)と密通して露顕し、むざんな制裁を受けた実話を、一立斎文車が講釈にかけて流行したものを種として脚色したもの。9幕30場という長編であり、こんにちでは2幕目の〈見そめ〉から〈赤間別荘〉、ついで〈源氏店(げんじだな)妾宅〉、最後に9幕目の〈伊豆屋〉が出ることがあるが、もっと有名なものが4幕目の〈源氏店妾宅の場〉で、伊豆屋の若旦那与三郎が、木更津で赤間源佐衛門の妾お富となじみ、露見して、総身に34ヵ所の刀傷を受け、またお富は海に身を投げるが別々に助かり、悪党仲間にも落ちた与三郎が、お富が兄とは知らずにかくまわれている源氏店の妾の家にゆすりにきて再会する。源氏店とは日本橋の玄治店(げんやだな)をきかせて、わざと実地名をさけたのである。与三郎の演技は初演の8世市川団十郎から、15世市村羽左衛門によって完成された。

(郡司 正勝)

きらん 宜蘭 Ilan 台湾北東部、宜蘭平野の中心都市。同名県の県政府所在地。人口59,500(1973推定)。宜蘭線が通じている。旧名を噶瑪蘭(かまらん)といい、平埔蕃の散居の地であったが、明代の末すでに漳・泉・粵3族による開拓が始まり、蘭陽米の産地となった。竹風蘭雨と呼ばれて新竹の風と並称される多雨の地。市の東門街に孔子廟(びょう)、西門街に城隍(じょうこう)廟のほか五穀廟などがあり、これらは明末の開拓の一段落とともに建立されたものである。

(富田 芳郎)

きらんそう *Ajuga decumbens* 路傍、山ろくなどに多いシソ科の多年草。茎は根もとから四方に広がって、地にはい、直立することはなく、全草に毛が多い。葉は対生、倒披針形で、あらいきょ歯があり、基部が細くなり柄となる。緑色であるが紫色をおびることが多い。春、葉腋(ようえき)に小さい花を数個ひらく。花はくちびる形で、濃い紫色で美しい。一名ジゴクノカマノフタ(地獄の釜の蓋)という。(佐竹 義輔)

キーランド Alexander Lange Kielland 1849~1906 ノルウェーの作家。スタヴェンゲルの名門の出で、れんが工場の所有者でもあった。29歳で文壇にデビューしたが、12年後には転身して郷里の市長になり、その後はまったく創作の

筆を断った。1906年に出た《ナポレオンのことども》は彼自身も作品中に加えない。短い文人生活のあいだに発表された多くの作品中《小説集》《続小説集》《ガルメン・ウォルセ商会》《はたらく人々》《エルゼ》《船乗りウォルセ》《結婚》《幸運》《雪》《聖ヨハネ祭》《ヤコブ》《動物と人間》などが知られている。舞台を郷里にとり、そこの人々の生活を写實的に描いた作品が多い。ヤコブセンと相知り、キルケゴール、ブランデスの影響を受けた。そのほかにハイネ、ディッケンズ、ツルゲーネフの影響も跡づけられる。貴族的で洗練されたエスプリのスタイリストであるが、バックボーンはしっかりしていて、中途半端なもの、なまぬるいもの、沈滞したもの、偽善、国教会などを攻撃した。なおKiellandの発音はヒェラン、チェランに近い。(西田 正一)

ギランバレーしょうこうぐん ギラン＝バレー症候群 急性に発病する運動麻痺。特に体軀と四肢の筋肉の衰弱が強くて、知覚変化はないが、圧痛がすどく、経過は良性、さらに脊髄液所見では細胞数は全く、あるいはほとんど増加しないのかかわらず、総タンパク量の著明な増加を見る(タンパク細胞解離という)ような症候群をいう。ギラン Guillain およびバレー Barré によって初めて記載された。特発性多発性神経根神経炎の際に見られるもので、特にタンパク細胞解離は本症候群の最も重要な症状である。しかし、一方タンパク細胞解離を示さない特発性多発性神経根神経炎の症例も報告されている。原因はビールスによるという説が最も有力であるが、このほか中毒説もある。多くは軽い呼吸器感染あるいは胃腸炎の経過のち1~2週で本症に及んでいる。同時に上記のような神経症状を呈し、治療後数日~数週で治ることが多い。治療は呼吸不全や感染症対策、神経障害にはビタミンB₁、B₂、B₁₂などの注射、または理学療法を行う。副腎皮質ホルモンによる治療が推奨されていたが、最近疑問視されている。

(椿 忠雄)

きり 切 日本の演劇や音楽の最後の部分をさす名であるが、こまかくいえば、種目によって事情がちがい、特殊な意味をもつ場合がある。まず、能ではふつう〈キリ〉と書くが、キリに広義と狭義とあり、広義にはすべての能の曲の最終の部分をさすが、狭義のキリは一定の形式をそなえたもので、七五調の韻文体で、5句から8句くらいまでの長さのもので、初句と終句はくりかえしてうたわれる。その音階や気分にも一定の型があり、主人公の後日の運命や作者の感想などが述べられる。《百万》のキリ〈よくよくものを案ずるに……〉は後者に属し、《三井寺》のキリ〈かくて伴ひたち帰り……〉は前者に属する。義太夫節(きだゆうふし)では、能のキリよりはずっと長い部分をさす。すなわち義太夫節の1段を3分した最後の部分のことで、1段が口、中、切に分けられる。それぞれ別の太夫(たゆう)によって語られ、〈切〉がもっとも大事でおもしろい語り場で、〈切〉をうけもつ太夫はもっとも格式が高い。しかし、この〈切〉にあたる部分を、つごう



キランソウ

によって〈奥〉とよぶこともある。太夫の格式のバランスなどによるもので、前に語る太夫より、それほど大きな格式の差がない場合に、〈切〉を格下げして〈奥〉とよぶのである。長唄(ながうた)などでは、曲の最終部を〈キリ〉とよぶかわりに〈段切〉とよぶのが普通である。

(吉川 英史)

きり [桐] *Paulownia tomentosa*

ゴマノハグサ科の落葉広葉樹。東亜産の植物で、日本のものは朝鮮または中国から渡来したものといわれる。現在では北海道の南部から九州にわたって植栽されている。その中でも栽培の盛んな地方は関東、東北、北陸地方であって、会津桐、南部桐などは材質が細密で最良材に数えられている。温暖地のキリは病害虫におかされやすく、材も疎軟となって品質が劣る。成長が速く、40年余りになれば、胸高直径90cm、樹高10m以上に達する。苗木のうちの木膚は平滑であるが、老木になると縦のひび割れが多くなって紋状を呈し、灰かっ色となる。葉は大きく、全縁または3~5裂し、花は大形の円錐花序で、5月・中旬ころ葉に先だって咲き、紫色をおび美しい。さく果は熟すると2裂開して、扁平な薄い翼をもつ多数の種子を飛散させる。材は白色絹糸光沢をもち、軽くて美しい。特にすぐれている点は、吸湿性に乏しくて耐火性に富み、音響の伝導がよく、また材質が均等で狂いが少ないから加工に便であることである。

〔品種〕日本で植えられているキリの種類には、前記のキリのほかにシナギリとタイワンギリがある。(1)キリ(ニホンギリ) 日本在来で、産地によって地桐、南部桐、会津桐などと呼ばれるが、市場では紫桐とか赤桐、白桐などの呼び名もつけられている。もちろんこれらは遺伝的に固定したものでなく、あくまで



キーランド



キリ

環境に支配された地域性品種名にすぎない。(2) シナギリ(ラクダギリ) 大正の初めころ移入され、ラクダギリの名でも関東地方に分布している。中国産にも山東、河南、四川地方で数種数えられるが、本種はそのいずれであるか不明であって、材質はよくない。(3) タイワングリ(ココノエギリ) 1935年ころ新高山(玉山)山ろくの標高800~1,000 m付近に育つ木から種子を取り移入したもの。成長が速く、病害虫への抵抗性が強い。材はニホンギリに劣るが、近ごろ輸入されている原産地材に比べてまさらといわれ、並製品に混用されている。

〔材の用途〕キリの種類とか栽培地の状況、生育のよしあしなどでその材質が違って来るから、材質に応じてそれぞれ使いみちが異なってくる。おもなキリ材の用途は、はきもの、建築、建具、家具、さしもの、楽器、経木、寄木細工、おもちゃ、仮面、浮子(うき)などである。

〔栽培〕苗は一般に根伏せといって、一年生の苗木についている根系の中から、太さ1~1.5 cmくらいのものをもって、長さ15 cmくらいにくだ切りにして、その頭部を平らに、下部を斜めに削って種根とし、これを4月上旬ころ、畑地にまっすぐに埋めておき、その1芽を伸ばして苗に仕立てる。3月下旬ころ、株間5.5 mおきくらいに植穴を掘り、基肥を入れて植え付け、その年は頂芽以下の側芽をかきとって伸ばしてやる。もし植えた木が折れ損じたり、すなおに育たないときは、翌春地ぎわから台切りして、改めて勢いのよい幹を仕立ててやる。キリは木取りの関係で、長さ6尺4寸(約1.9 m)、末口の皮なし直径6寸(約18 cm)を1玉といい、直径1寸(約3 cm)増すごとに玉数が2玉、3玉と加算されるから、木を育てる場合も、枝下を6尺4寸(1玉高)、10尺(1.5玉高)、13尺(2玉高)に決めて仕立て、この幹を無傷に太らさなければならぬ。特に病害虫の防除を怠っては期待する収穫が収められない。

(小野 陽太郎)

きり 桐 模様および紋章の名。桐は中国で鳳凰(ほうおう)の住む木としてたっとばれてきた。日本でもこの思想から天皇の袍(ほう)の模様に桐竹鳳凰をつけ、その他の調度や器物の模様にもこの模様が多く用いられた。紋章としての桐文はこうした文様が固定したものと思われる。

したがって皇室でも菊花とならんでこの桐も紋章として用いられていた。足利氏、豊臣氏がこれを用いたのも皇室から与えられたものといわれ、これがさらにその一族、または家臣の間にひろがったので、武家のあいだにこの紋を用いる家が多い。紋の種類は三つ葉に五七または五三の花をつけた大内桐、嵯峨桐、鬼桐などのほか、これを円形に扱った割桐や桐車、桐丸の類から、桐菱(きりびし)、桐蝶(きりちょう)、蝙蝠(こうもり)桐などのような変わったものまで、130~140種におよんでいる。→紋章 (山辺 知行)

きり 錐 木材に穴をあける工具。種類とおもな用途はつぎのとおりである。三つ目錐はくぎの下穴をあける。四つ目錐は木くぎや竹くぎの下穴をあける。つば錐はくぎの頭を隠すための穴をあける。ねじ錐はボルト穴をあける。さじ錐は木ねじの下穴をあける。さら錐は木ねじのさら頭を沈めるさら穴をあける。羽根錐は穴の縁のきれいな丸穴をあける。三つまた錐は比較的大きな丸穴をあける。さじ錐、さら錐、羽根錐、三つまた錐は柄の部分の短く、クリックボールやハンドドリルでくわえて使用する。なお、金工用の錐は、木工用との混同を避けるため通常ドリルと呼んでいる。→ドリル

(鈴木 正吾)

きり 霧 細かい水粒が空気中にたくさん浮かび、光の直進がさまたげられて、まわりの見とおしが悪くなった状態、あるいはこのような水粒そのものを霧という。霧をガスとかくもやとかいうこともあるが、いずれも霧の濃淡には関係なく使われる。しかしくもやについては気象観測では1 km以上の地物が見えるようなひじょうにうすい霧をくもやと呼ぶときめがある。これは気象観測で天気の種類をきめるときの特殊な使い方である。

〔霧の濃さ〕見とおしがきく距離の大小によってわれわれは霧が濃いかうすいとか感ずる。この関係はだいたい右上表のとおりである。

〔朝霧は晴のしるし〕よく晴れた、静かなときは、夜から朝にかけて霧のでることがよくある。こういうときは、地面が熱の放射によってひじょうに冷えやすく、したがって地上の空気が下方からいちじるしく冷やされるために、空気中の水蒸気が凝結して霧を生ずるのである。日が出て暖められると、やがて霧が蒸発して消えてしまう。

〔海の霧〕港や湾のなかでは、海面がうすい霧でおおわれたり、海面からうすい湯気のような霧が立ちのぼったりするのを見ることがある。これは、暖かい陸上の空気が冷たい海面上へ流れていって冷えるため、あるいはこれとは反対に冷たい陸上の空気が暖かい海面上へ流れて暖かい空気とまざるために発生するものである。このような霧は、厚さもせいぜい2~3 m以下で、長く続くものではない。しかし、海上では大規模な濃霧が広い海域にわたって発生して幾日も続くことがある。その厚さも数十~数百mがふつうであり、一般に霧雨を伴う。この濃霧が風に吹き流されて海岸へおしよせ、また数kmの内陸まで侵入することも珍しく

霧の濃さ

霧の濃さ	地物(夜間は数十燭光の電球の光)を認める最大距離
ひじょうにうすい	1 km以上
うすい	500 m~1 km
ふつうの濃さ	200 m~500 m
濃い	50 m~200 m
ひじょうに濃い	50 m以下

注 霧の濃さの極限としては2~3 m先の物が見えないようなこともある

ない。こういう大規模な海霧は、暖かい海上を長く吹き渡ってきた高温、多湿の風が急に水温のひじょうに低い海域にやってきたときに発生する。1949年高橋喜彦は、冷海面上で暖かい空気が下方から冷やされるとしだいによむ傾向ができ、後から流れてくる空気がこれをのりこえるために上昇気流ができて、水蒸気の凝結が起るのであると説明した。すなわち、こういう海霧は雲が海面までたれ下がったと同じようなものであるから、したがって霧層も厚く、また霧雨も伴うものである。このような大規模な海霧は世界のいくつかの海域で見られるが、水温や暖かい風の方向と関係があるので、発生するところや季節はきまっている。日本では、6~7月ころ千島列島および北海道の近海を流れる親潮寒流の海域に発生するものがある。カリフォルニア沖では夏季にこういう海霧が発生する。このほか、高緯度地方の海域では前線に伴って濃霧の発生することがある。この霧は明らかに前線によってできた雲が、凝結する高度がきわめて低いために海面までたれ下がったものといえることができる。日本付近では、オホーツク海上の濃霧はこの種の海霧のことが多い。海上の濃霧は、しばしば船舶の進路を誤らせ、遭難の原因となる。たとえば、日本近海における遭難の約50%は濃霧によるものである(神戸海洋気象台の調)。霧中の衝突や座礁を防ぐため、霧笛を鳴らして船舶あるいは灯台の位置を知らせるほか、現在ではさらにレーダーも使われるようになった。

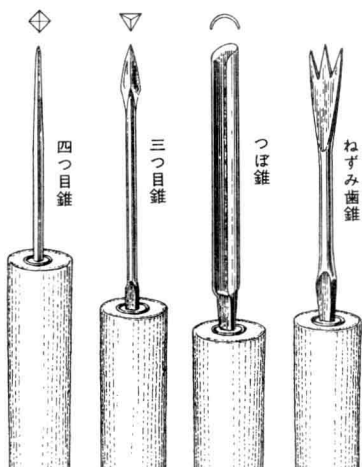
〔湖や沼や川の霧〕夏は、水面があたりの空気よりいちじるしく低温であるために、風が弱い場合は湖や沼や川の面にうすい霧のでることがある。冬は、水面が暖かいために湯気のような霧が水面から立ちのぼるのがしばしば見られる。

〔雨に伴う霧および雨後の霧〕春から夏にかけて暖かい雨に伴って霧のかかることがある。暖かい雨滴から蒸発した水蒸気が冷たい空気の中で再び凝結するためである。また、雨がやんだ後に霧の発生することもあるが、これは雨のためにひじょうに湿った空気が、そのあとから吹いてくる冷たい空気とまじるために冷やされて水蒸気が凝結するためである。

〔山の霧〕山では霧におそわれることがよくある。この霧は山にかかった霧で、一般にひじょうに濃く、わずかに数m先が見えなくなることも珍しくない。そして、雨や風を伴うことが多い。山での遭難の大部分は濃霧がその原因となっている。ときには、山小屋から数m離れたところで倒れていたという例もあって、この例



錐のいろいろ。上図は様子錐。上の丸い頭をからだにあて、ハンドルを回して使用する。左下はいずれも替刃



からも山の濃霧の濃さが想像されよう。

〔温度が氷点下の霧〕空気中に浮かぶ水粒は、温度が氷点下になってもすぐに凍るものではなく、 -15°C くらいまでは凍らずに過冷却の状態にあり、また水蒸気も昇華して氷晶ができるよりはむしろ凝結して過冷却の水粒ができる。このようなわけで、 -15°C くらいまでは凍らない水粒の霧を見ることは決して珍しくない。シンプソン G. G. Simpson はアイスランドにおいて -29.5°C でなお凍らない霧を観測したことがあるという。過冷却の霧粒が地物に触れると、たちまちその表面に凍りついて霧水をつくる。温度がひじょうに低い場合は、水の霧が見られる。これを氷霧という。空気中に浮かぶたきんの細かい氷の結晶がきらきらかがやいて見える。

〔スモッグとその対策〕大都会や工場密集地帯のような煙の多いところでは濃霧が発生しやすい。1905年デ・ヴォー Des Voeux はこのような煙まじりの濃霧をスモッグ smog (煙 smoke + 霧 fog) と呼ぶことを提唱した。この言葉はまだ気象学上の正式な用語にはなっていないが、第二次世界大戦後に社会問題として大気汚染が大きく取り上げられるようになるにいたがい、スモッグなる言葉が一般に広く用いられるようになった。したがって言葉の意味も広くなり、もはや霧そのものの性質を帯びていなくとも、あるいは煙の濃淡には関係なく、現在では自動車や工場からの有害な排気ガスが異常に立ちこめた状態を表わす言葉として使われるようになった。スモッグは、天気がよくて風がない夜から朝にかけて地上付近の空気がひじょうに冷えたときに発生しやすい、特に冬季に多い。地上から数十 m くらいの高さまで冷たい空気がよどみ、気温逆転層(下層の気温が低く、上層の気温が高い状態で、下層はきわめて安定な空気層)ができるため煙や排気ガスは上空に散らずに地上付近にたまる。煙の粒子は吸湿性が強く、排気ガスの中には水蒸気と結びつく性質のものがあるので、霧はひじょうに濃くなりやすく、また日の出後もなかなか消えにくく、ラッシュアワーの交通麻ひを引き起こすことさえある。排気ガスを問題とする広義のスモッグは、それを吹き散らす風がないかぎり、大都会や工業地帯およびそれらの周辺地域には常に存在するものとみてよい。そして、気温逆転層ができたときにはスモッグ(広義の)がひじょうに濃くなり、有害ガスが人体への許容量をはるかに越えることがある。

むかしのスモッグは主として石炭の燃焼によるばい煙まじりのもので、かつての有名なロンドンの霧はこのよい例である。近年は燃料としての石炭の消費量が減り、また煙突内の電気集じん装置によってばい煙を極力防止しようとしている。一方、自動車の激増や石油化学工業の発達による排気ガスが増加したので、スモッグの性質もばい煙まじりのものから亜硫酸ガスや一酸化炭素などの有害成分を多量に含んだものへと変わってきた。ロスアンジェルス市のスモッグがそのよい例である。この有害なスモッグを防止するため、各国ではいろいろな対策が研究されている。たとえば、ガソリンの不完

全燃焼に起因する自動車の排気ガス中の一酸化炭素は再燃焼装置を取り付けることによって除去することができ、化学工場からの有害ガスも完全燃焼や化学処理の方法の実用化が進みつつある。大気汚染防止法というような法律をつくって、工場施設や自動車設備を公衆衛生の立場から改良しようとしている国もある。また、大気汚染がある限度を越えたときは、警報を発して工場などの操業を一時規制するという対策を講じている地方もある。工業都市の気象的な立地条件は大気汚染を大きく左右するので、その周辺の都市への影響も考え、風の観測や気温逆転層の発生回数などの調査が重要視されている。なお、原子力工業の発展はスモッグの成分にさらに放射性物質が加わることが予想され、将来はその防止対策も研究されなければならないものと思われる。

〔人工消霧〕1938年アメリカのホートン H. G. Houghton およびラドフォード W. H. Radford は、吸湿性の強い塩化カルシウムの濃溶液を霧の中で噴霧させる方法を試み、その実験結果の一例として、見とおしの距離が250 m であった霧を750 m までうすめることができたとして報告している。第二次世界大戦の末期、日本では飛行場における霧の人工消散の戦時研究が行われ(主任中谷宇吉郎)、消霧車(重油バーナーをすえ付けたトラック)を駆けめぐらせて霧を暖めて蒸発させる方法を考えた。この消霧車はできあがったとたん上空で焼かれ、使用されずに終わった。また、この大戦中イギリス本土では飛行場でガソリンを燃焼させ濃霧を消散させ、ドイツ空軍の襲撃に対して迎撃機を離陸させることができたと報ぜられている。戦後ソヴェトでは、人工降雨にならってドライアイスやヨウ化銀を使用して、氷点下の気温における飛行場の過冷却の霧を雪に変えて降らせてしまう実験や強力な音波で霧粒を揺り動かして衝突させ、雨にして降らせて霧を除く試みが行われたと報ぜられている。日本でも近年、北海道の千歳飛行場でプロパンガスを燃やして霧を消す実験が北海道大学の孫野長治らによって行われた。現在では人工消霧は、技術的には解決され、いずれの方法にしてもその経済的価値だけが問題である。→大気汚染 (高橋 喜彦)

ぎり 義理 義とは古代中国で発見された観念であるが、その内容の充実したのは、日本にはいつからである。正しいみちすじという意味であって、義理ともいわれた。したがって人間社会の生活形式の上の、相互協調のようにも解釈されるべきもので、広義の礼でもある。しかし社会生活の発達につれて、正しいみちが絶対主義的な立場をもったとき、道義とか正義とかいう場合を生じたが、さらに社会層の下の拡大につれて、人間の生活・個性的意欲との交渉を生じて、感情との関係下により複雑化の傾向を示した。この場合を義理人情という。

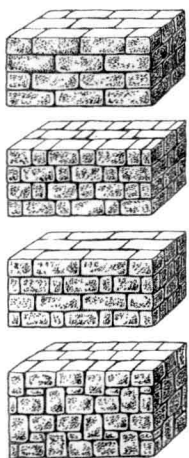
【義理人情】平安時代末(12世紀後半)に氏族専制政治が崩壊して、下層にいた武士層が新たに台頭したとき、彼らは自己を犠牲として、反乱平定と輩下の生活保証とにあてた。これは親子間にみられると同様な情のあらわれである。ここに恩

を生じて恩義ともいった。恩義は主従の連鎖を強くむすんだ。彼らにより鎌倉時代(13世紀)にかけて、恩義の観念を強固な内容たらしめて、彼らの生活道すなわち武士道の基盤をも構成した。さらに戦国時代(15世紀後半)にはいると、各地の大名は反省と自覚を伴って、いっそう拡充したが、そのままにうけついで徳川氏は儒教倫理を折衷して、一般庶民の生活規範とした。庶民層は15世紀以来、比較的自由な位置におかれてきたために、人情との調和の上には、相当苦悶が生ずるのだった。武士に課せられた決死の手段さえ、町人らが生活解決の方法として実行に訴えて、義理人情をまっとうすると解した。〈心中(しんじゅう)〉の現象は〈義〉に敗北した形式で、〈情〉に勝った町人の賛歌であった。(守随 憲治)

一般に義理は社会に既存している道徳・習慣であり、生活の規範である。これに対して人情といわれるものは、人間の普遍的感情であり、その本能・欲求でもある。道徳・習慣はもともと人間の社会生活を円滑にする必要から生じたもので、本能・欲求ないしはそれらに伴う感情と矛盾したものではないが、それが固定性をもつところから、絶えることなく流れてゆく人生に対しては、たい積した土壌のようになる。そうすると人生の流れは、それと摩擦し、衝突し、あるいは阻止されて渦をなすようになる。この摩擦・衝突の関係が、すなわち江戸時代の文芸家が好んで題材にとりあげた義理人情の葛藤(かっとう)衝突にはかならない。たとえば井原西鶴の《武家義理物語》には、つぎのような物語を収めている。摂州伊丹の城主荒木村重に仕える神崎式部は、ひとり子の勝太郎を伴って、主君の御次男の東国蝦夷が千島御一覽の旅の御供をして大井川の渡りまで来た。ところがちょうど雨季で、大井川には水が出ていて渡るのにひじょうに難儀した。同役の森岡丹後の子ども丹三郎をも連れて同行していたが、勝太郎が無事岸に上がったのに反し、丹三郎は誤って水中に落ちて死んだ。式部はとうくにれて勝太郎を呼びよせ、〈丹三郎義は親より預り来りて茲(ここ)にて最後を見捨、汝世に残しては丹後手前武士の一分立がたし、時刻移さず因果よ〉といったので、勝太郎は水中に飛び入ってふたたび姿は見えなくなった。式部は暫く世を觀じ、まことに人間の義理ほどかなしいものはない、自分はたったひとりの勝太郎に別れ、将来なんの楽しみもない、ことに母のなげきはつねでない、などと思えばひとしおかなしさが増し、子どものだを追いにくくなるが、それでは主命の道にそむくので、若殿が無事に帰城されたのを見届け、たうえ、病気を理由に御ひまを請うて伊丹を立ちのき、播州の清水に山深くわけ入って、夫婦形をかえて仏道にはいった。これを伝え聞いた丹後夫妻も、式部入道の跡をしたって山に入り、たぐいぬ後世の友となっておこないすまして年月を送った。これは人情を殺して義理に従った武士のかなしさをテーマにした物語で、義理が結局なき子どもを追慕する人情に抗しえず、出家人道を余儀なくせられた結末になっている。いまでも歌舞伎(かぶき)や映画のドル箱とされている《忠



キリガイ



切石積み 上の三つは整層切石積み、下は乱層切石積み

キリウジガガンボの成虫(上)と幼虫

臣蔵》なども、全編がこのテーマで貫かれていて、このような劇文学が栄えた江戸時代の封建社会の不健全さを例示している。(古川 哲史)

【民俗語としての義理】民俗語としての義理は、交際関係の拘束を意味している。〈たれそれには義理がある〉〈義理があるから顔を出さねばならぬ〉とかいうふうにする。義理といえば、だいたいどういうことを交際関係で守ることなのか、暗黙のうちに了解されていて話が通じる。人と人とのつきあいを維持するのに必要なもの、それが義理とされてきている。元来世間をさす語であったくぐがい(公界)も、交際関係を意味する言葉になって、〈きりくがい〉(滋賀県栗太郡)、〈きりこうがい〉(和歌山県西牟婁郡)というい方が行われている。たとえば会葬に参じたりすることが、その内容をなしている。義理といえば、凶事に際しての訪問を意味するところは多い。いったいに民衆は、〈誰が義理をよく守る〉〈義理がたい〉〈あれは義理知らず〉などというとき、その人が冠婚葬祭などの儀礼に参会するか、贈物をするか、逆にその贈物にお返しをするか、という点で判断する傾向がある。中でも葬儀関係がいちばん重視されている。しかしなお、屋根葺(ふき)・普請(ふしん)・田植えなどの作業に協力するかどうかをその基準としているところも多い。もともと村の中だけが世間と感じられ、平素仕事を協同して行うもの同士だけに交際関係があったような古い段階では、なによりもまずその仕事に協力することが義理であったし、冠婚葬祭への参加も、つまりはそれを欠いては、仕事の協力を得がたくなることから促されたのであった。愛知県北設楽郡では田植えや屋根葺に無償で手伝いに出ることを、〈義理〉とか〈おつきあい〉とかよんでいるのは、その点はなほだ象徴的である。それが近代以降、職や作業での関係、同族や近隣の間柄とは違ったものになってきて、交際関係は複雑にもなり、儀礼的な贈答をもってするたんなるつきあいのためのつきあいの義理が問題となるようにもなった。正月や葬儀に際し、贈物をどれだけするかによって〈二升餅(もち)のつきあい〉〈一升餅のつ

きあい〉というふうに交際相手の家を分類してきた地方も多いように、贈答は交際の義理の端的な表現であった。

(和歌森 太郎)

きりあがり 切上 下部の坑道から上部の坑道に向かって鉱体内に掘られた垂直または斜めの坑道をいう。そのおもな目的は、(1)上下坑道間の鉱床の状況を調べ、(2)坑内通気を改善し、(3)上下坑道間の通路(人道)を作り、(4)鉱石や〈ずり〉のシュート(落し)に使うなどである。(下村 弥太郎)

きりあふら 桐油 〈とうゆ〉ともいう。アブラギリ属の植物の種子核油。これを含むおもな植物は6種あるが、経済的対象となっているのは次の3種である。ニホンアブラギリは北陸、山陰、南関東で栽培され、植栽後4～5年で結実し、30年が最盛である。シナアブラギリはカントシナアブラギリに比べて結実が早く、〈三年アブラギリ〉の別名があるが、実際の結実期はこれより遅れる。カントシナアブラギリは分布がシナアブラギリより南に多く、結実がよりおそく、〈千年ギリ〉の名がある。搾油法は、果実が熟すれば、果皮を発酵または乾燥後の粉砕によって除き、得られた種子を乾燥し、温圧法によって搾油する。2番しぼりまで行う。種子1石(180*l*)から油1斗7升～1斗8升(31～33*l*)が得られる。乾性油の典型的なものの一つであり、日本の需要の3/4以上は輸入(中国から)に依存し、アマニ油と用途が競合する。古くは油紙、雨がっぱなどの製造に用いられ、近ごろは乾燥の速い特性を利用して、ペイント、ワニス、リノリウム、焼付塗料などに用いられる。主成分はα-エレオステアリン酸およびオレイン酸のグリセリドで、乾燥性はこれらの不飽和脂肪酸が空中の酸素によって固化することによって生ずる。中国産桐油のほうがニホンアブラギリの油よりやや乾燥が速い。なおパルミチン酸、ステアリン酸などの飽和脂肪酸のグリセリドも含有される。→アブラギリ (南 亨二)

キリアン Gustav Killian 1860～1921 ドイツの耳鼻咽喉(いんこう)科医。マインツに生まれた。シュトラスブルク、フライブルク、ベルリン、ハイデルベルクなどの各大学で医学を修め、1884年に医師免許証を得、ベルリン大学で耳鼻咽喉科学を専攻した。88年フライブルク大学耳鼻咽喉科学教授となる。1919年ベルリン大学に招かれ、耳鼻咽喉科教室を主宰した。鼻・咽喉疾患の診療に特に詳しく、98年気管支鏡を考案し、前頭洞(どう)の手術式を発明した。

(大島 蘭三郎)

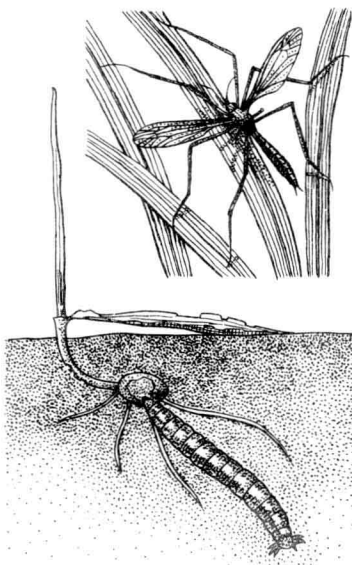
きりいしづみ 切石積み 切石(一定の形に切り取った石材)を一定の規則に従って積み上げた構造物。普通、横目切を水平に一直線に通し、縦目切は等間隔または一定の規則をもった間隔で積み、これらを整層切石積みとよぶが、ときには横目切を通さない方法もあり、乱層切石積みという。切石積みに対して不定形の野石を積み上げたものを野石積みという。(松下 清夫)

きりう 桐生[市] 群馬県東部の機業都市。1921年市制。1954年梅田、相生の

2村と川内村の一部、1955年毛里田村の一部、59年栃木県の菱村を編入。人口133,141(1970調)。足尾山地の南端にあたる山脚に近く、渡良瀬(わたらせ)川と桐生川の合流点に接した平地に位置している。市街は桐生川に沿う街村としての本町通りと、渡良瀬川に沿う街村の新宿(しんしゅく)通りから成り、その周縁にひろく工場地帯が発達している。現在は輸出用の絹織物のほかに、内地向けの合織、絹、人絹その他が織られ、とくに帯地、御召、服地、服裏地などの生産が多く、市民の生活は機業と深い関連をもっている。市街の北部には群馬大学工学部がある。(矢嶋 仁吉)

〔沿革〕桐生絹は、すでに室町時代末期から「仁田山絹」の名で知られていたが、天正年間(16世紀末)に桐生新町が創建され、領内農村から住民が強制移住させられたのが大きな画期であった。このころすでに節市として絹市が開かれていたが、のち2,410匹のいわゆる御旗絹上納による助郷(すけこう)役免除の特権を得、絹市を中心にしだいに市場町として隆盛におもむいた。貞享・元禄(1684～1704)ころには江戸・京都方面に買次問屋が荷物を送っている。この間1658年(万治1)には西隣の大間々(おおまま)に絹市が立てられ、一時桐生の衰退を招いたが、1731年(享保16)には桐生絹市を再興して繁栄を回復した。さらに享保期から白張法、紅染法などの染色法の改良が行われ、38年(元文3)には高機(たかはた)の移入による製織法の改良、83年(天明3)に燃糸(よりいと)・八丁車の発明などつぎつぎと先進技術の導入・発明が行われ、桐生織物の名は高まった。1657年(明暦3)には141戸であった戸数が1819年(文政2)には769戸に増加していることや、天保ころには絹買・張屋・織屋・小紋紺屋・糸屋・績屋仲間などそれぞれ分業による仲間が成立していることは、桐生の発展を示すものである。このような桐生の発展は、周辺農村に展開した農村家内工業としての機業にささえられていた。そこでは農村への貨幣経済の流入による農民層の分解を利用し、有力な土豪の農民は没落農民を賃機(ちんばた)の形で支配した。天保期には数台の内機をみずから経営するとともに数十台の賃機を所有して生産する織元があらわれており、幕末期にはこのような形で問屋制家内工業、マニファクチュア経営が広くみられるにいたった。以上のような桐生の発展をつらぬく一つの特色はその農村の性格にある。在郷町としての桐生は江戸中期以降明らかに都市化しているにもかかわらず、行政組織・年貢負担の形式は幕末まで農村のそれにひとしく、問屋・機屋の商工業者は、農閑渡世として営業し、事実、幕末にいたるも農業経営を放棄していない。このような農村工業としての桐生織物業の発達のみかたは、京都の西陣などに典型的にみられる都市手工業としての織物業と対照的な形態を示している。この農村工業から出発する桐生織物業が、明治以降完全な近代的大工業に発展することができなかったのは、周辺農村の特殊性に基づくものであろうと思われる。

(村井 益男)



きりうじかがんば *Tipula aino* 俗にキリウジ、オヤカ、オニカ、カトンボともいう。日本全国に分布し、イネ、ムギの発芽期に加害する害虫。双し(翅)目ガガンボ科に属する。成虫は大形のカのような形をして体長15mmくらい、全体灰かっ色、2枚の微かっ色の半透明なはねをもち、脚は細長く折れやすい。卵は長径1mm、黒色で光沢があり、一端に4mm内外の白色毛をつけている。幼虫は体長25mmくらい、円筒形で土色。体面にしわが多く、先端に口器、尾端に3対の肉質突起がある。発生は年2回、冬は幼虫態で土中で越冬。3月下旬ころからさなぎになり、5月中旬が成虫の発生最盛期となる。卵はあぜやみぞなどの湿った土中に浅く数粒ずつ産まれる。卵は約10日でふ化し、幼虫は地表下を潜行し、イネの苗の幼根をゆり動かしたり、幼根を食い切って、ころび苗や浮き苗を生ぜしめる。また種子を食害し、発芽あるいは若苗の生育を悪くさせ、はなはだしいときは枯死させる。幼虫は2ヵ月くらいで老熟し、土中でさなぎになり、第2回目の成虫は9月中旬を中心に現われて、水田や付近のあぜなどの湿地に産卵する。ふ化幼虫は土中の有機質を食べて生育し、ムギがまかれると、このムギの種子や根、芽などを食い、生育障害や発芽不能に陥らせる。ムギの被害は種まき期に田がかわきにくい湿田の北陸や山陰地方に多い。防除法としては、苗代(なわしろ)では水を落としてDDVPなどをまく。ムギの場合、種まき前に種子にヘパタクロル粉をまぶしてからまくのが効果的であったが、現在ヘパタクロルは市販されていない。(山崎 輝男)

きりうゆうゆう 桐生悠々 1873~1941 ジャーナリスト。本名は政次(せいじ)。石川県金沢市に生まれ、1899年(明治32)東京帝国大学法科大学政治学科を卒業、文筆家として立つ。1902年言論一致協会を、機関誌《新紀元》を創刊するにあたって、その編集主幹となり、文章改良運動に力を注ぐとともに、他面文明批評家として名をあげた。のち大阪朝日新聞、下野新聞、大阪毎日新聞、東京朝日新聞などを経て、13年(大正2)名古屋の新愛知の主筆となり、28年(昭和3)長野の信濃毎日新聞主筆に転じ、同社の発展に努めたが、33年紙上に〈関東防空演習を嗤(わら)ふ〉の一文をのせるなど、軍部の施策を批判したため、その圧迫によって同社を追われた。著書に《現代文明の批評》その他があるが、晩年軍の圧迫に抗して刊行した個人雑誌にのせた論文は、死後に《畜生道の地球》と題して出版された。(西田 長寿)

きりかい *Terebra (Tripostephanus) triseriata* ひじょうに細長い巻貝。その形がきり(鋸)を思わせるのでこの名があるが、また千枚通しのような感じもするのでトオシの名もある。巻数は50回以上に達し、巻貝の中で最も細長く、最も巻数の多い種類の一つである。殻の高さ10cmくらい、直径8mmくらいで、各螺(ら)層は中央部が少しへこみ、表面は布目状で、全体淡黄かっ色。紀伊半島や瀬戸内海から南、遠く熱帯まで分布し、オ

ーストラリア北部にまで達している。浅い砂質の海岸に住み、その中にもぐっている。(滝 庸)

きりかえばた 切替畑 森林を伐採して木材を利用し、そのあとを開墾して、数年間アワ、ソバ、マメ類などの作物を栽培し、粗放な農作を行い、地力が衰えて収獲が減少すると再びこれを森林として利用する方式。その場合、天然にハシノキなどの侵入するにまかせる場合と、クヌギやナラを植えて、伐期が来たときにこれを伐採利用し、切株から芽を出して再び森林になるまでの間、畑として利用する場合と、再び林地とする場合にスギ、ヒノキなどを植えて用材林をしたてる場合がある。最後の方式は植林の地ごしらえ費節約に行うこともある。

(佐藤 大七郎)

きりかね 切金 蔵金とも書く。平安時代に日本独特の発達をとげた仏像、仏画の装飾法。金箔(きんぱく)や銀箔を小さな点や細い線に切って、種々な形にはりあわせ美しく輝く文様を構成する。切金というのは新しい呼び方で、中世には細金(ほそがね)と称された。この技法の起原は大陸にあって唐時代の遺例も発見されている。8世紀ころ(奈良時代)に日本に伝わったが、当時は文様が簡単に箔も太く、彩色文様のおぎなひとして用いられる場合が多かった。平安時代にはいっても9世紀の遺品ではまださして変化を示さないが、10世紀ころから技術も進み複雑な文様が生み出された。それまでは三角形・四角形・菱(ひし)形などの小片を組み合わせた点綴文(てんてつもん)や、これに石畳文や格子などの直線文を配するにすぎなかったが、11世紀ころから曲線の使用がしだいに進み、花輪違(はなわだち)、立涌(たてわく)、卍(まんじ)つなぎ、唐草(からくさ)などの華麗な文様が、仏菩薩(ぼつさつ)の着衣や光背(こうはい)台座などの全面をきらびやかに飾るようになった。これは12世紀中ごろに円熟の極に達するが、やがてあまり技巧に流れすぎて装飾過剰に陥り、13~14世紀(鎌倉時代)にはいっそう細密化し、しかも金地の上にこれを置くなど工芸的なものとなって、ついにその生命を失うにいたった。その様式的変遷は仏像や仏画の製作年代推定に役だっている。(秋山 光和)

きりがみざいく 切紙細工 紙を切りぬいて種々の形をつくる手芸。〈切りぬき細工〉ともいう。古くから世界各地で行われているが、抽象的・幾何学的模様をつくる切紙模様、人物・風物の形を切りぬく切紙絵、切紙を組み立てて家や家具のひな形をつくる切紙の模型などが行われている。

日本の伝統的な切紙模様に〈紋切〉がある。紋形の対称性を応用して、正方形の紙を一定の方式で折りたたんで紋章の部分を作りぬく手法で、紙をひろげると全体の紋章が得られる。紙の折り方には図のように、一つ折から五つ折までが行われている。また種々の紋形を切りぬいた厚紙を型紙として、その上から色をすりこんで簡単に紋章を描く方法も行われ、〈紋切形〉とよぶこの型紙は江戸末期には市販されるにいたり、明治中期までは

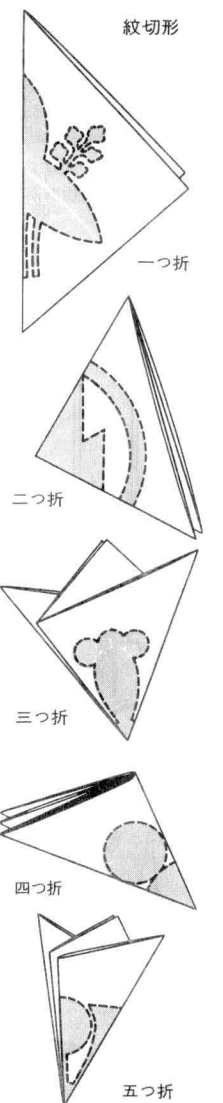


切紙細工 左は中国の剪紙。下は紋切形の例。一つ折は立沢瀉、二つ折は丸に松川菱、三つ折は六つ丁字、四つ折は九曜、五つ折は剣梅鉢

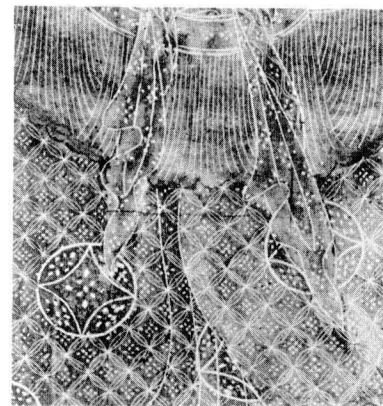
縁日の露店でもこれを買っていた。きまりきった様子を俗に紋切形とよぶのはこれに由来している。七夕(たなばた)祭の笹(ささ)に飾りとしてつける〈菱(ひし)つなぎ〉、〈網〉、クリスマス・ツリーをかざる〈きらきら星〉も、この紋切と似た手法でつくられる。中国(主として華北)で刺繍(ししゅう)の下絵などにつかわれる剪紙(せんし)も精巧な切紙模様であり、独特の民族的様式をもっている。小学校の工作教育で行われる切紙模様はもっと自由に模様を切りぬき、つないでいくものが多い。

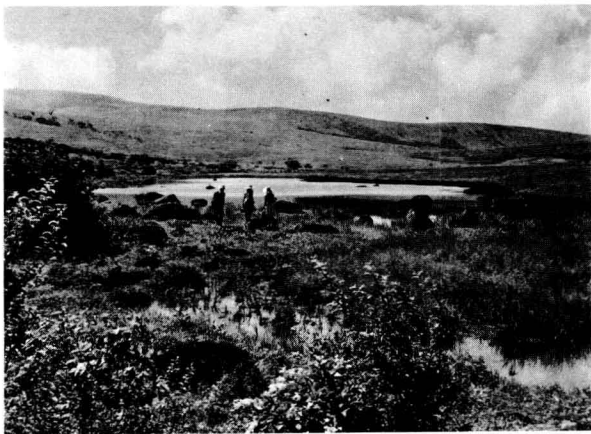
切紙絵の代表的なものにシルエットの切紙があり、大道芸として即席に人物のシルエットを切りぬく芸人がみられるが、そのすぐれたものは影絵芝居やアニメーション映画にも応用され、日本では回灯籠(まわりどうろう)にも応用されている。シルエット silhouette という言葉は18世紀のフランスの蔵相エティエンヌ・ド・シルエットの緊縮財政によって、画家までも色彩をつかわず、黒白の影絵を描いたことに由来するとつたえられているが、日本では文政年間(1818~30)、人の似顔を紙に切りぬいて見世物にする芸人があったことを《嬉遊笑覧》はつたえている。19世紀からヨーロッパで行われた〈着せかえ人形〉も、厚紙を切りぬいた裸の人形に切紙細工の衣装を着せる遊戯で、衣装や人形は市販されたが、手製のものによっても遊ばれた。遊戯的な切紙細工としては、そのほかヨーロッパで古くから行われるハンド・ドラゴンがあり、切紙の着物や人形を指先にはめてあやつり、見世物にもされた。

造花も切紙模型の一種で、日本では《万葉集》の掾久米朝臣広縄(じょうのくめあそんひろなわ)の和歌にもうたわれており、当時は綵(あやぎぬ)製であったといわれ、《枕草子(まくらのそうし)》にもウメ(梅)の造花に関する記録があり、江戸時代になると寒冷紗(かんれいしゃ)や薄紙でつくられるようになった。1856

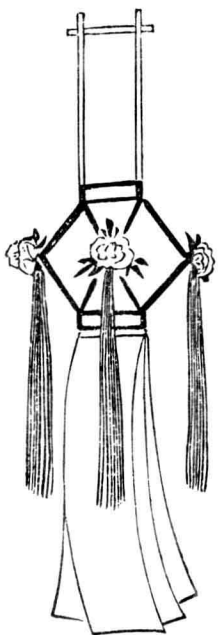


切金 《伝船中湧現観音像》(平安時代)の衣の部分





霧ヶ峰高原。八島ヶ池
付近の湿原植物群落



切子灯籠<守貞漫稿>より



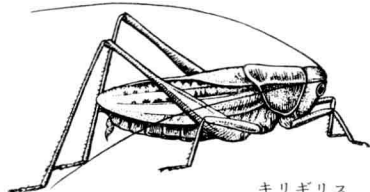
切下げ

年(安政3)山中庵其竜と山桐庵其風が大
阪の難波新地で、花、果実、玉川、飛鳥
(あすか)山、吉野山一目千本のサクラ
(桜)などを切紙でつくり、大いに人気を
博したという。現在でも町や家の紙製模
型が小学生のあいだで作られているが、
1954年イタリアのトリノで催されたトリ
エンナーレ展には、アメリカの建築技師
フラーが紙にビニルをかぶせて作った実
物の家を出品して人目をおどろかせた。
なお切紙細工に似た美術に〈はり絵〉が
ある。→張絵 (小高 吉三郎)

きりがみね 霧ヶ峰 長野県諏訪市北
部にあり、車山(1,925m)を主峰とする
高原状の火山。富士火山帯に属し楯(た
て)状死火山である。旧期の雲母、角セン
石、輝石安山岩類を基底とし主として角
セン石、輝石安山岩の溶岩流から成り立
ち、いくつかの断層で山体が切られている。
盤状節理の発達した新期溶岩の一部は
鉄片石(てっぺいせき)と称し、石材と
して切り出されている。周辺の傾斜地以
外はほとんど草原で、所々に主として断
層に関係した湿地がある。八島ヶ原、踊
り場などの湿地は有名で、これらの草原、
湿原には多くの特殊な植物が繁茂し、交
互に美しい花をつける。また和田峠付近
の黒曜石、御射山(みきやま)競技場跡な
どの特異な史跡がある。最近はバス交通
の便もよく、夏のハイキング、冬のスキ
ー、蓼ヶ海(たてのうみ)のスケート、グ
ライダーの練習などスポーツでにぎわっ
ている。1964年に、八ヶ岳中信高原国定
公園に指定された。

(西村 昭二・荒牧 重雄)

キリキア Cilicia シリシアともいう。
小アジア南東部のキプロス島に面する海
岸地帯。この地方の西部台地はもっぱら
海賊の根拠地として知られたが、東部平
野はアマブドウなど農産物に富み、また
東隣シリアと北隣カッパドキア、リュ
カオニアないし小アジア内地をつなぐ交
通の要路にあたり、トロス山中の〈キリ
キア関門〉や、前333年アレクサンドロ
ス大王がダレイオス3世を破ったイッソ



キリギリス

スなど、歴史的な事件の舞台となった。
タルソスその他の都市は早くからギリシ
ア化された。ヘレニズム時代にはシリ
ア・エジプト両王国の争奪的となり、
前102年ころからローマの支配が及び、
前67年のポンペイウスによる海賊征伐以
後その統治に服属した。のちビザンティ
ン帝国領となり、8世紀アラビア人に侵
入され、11世紀にはこの地方にアルメ
ニア人の国家が建設された。その後、14世
紀にマムルーク朝に征服され、以後20世
紀にいたるまでトルコの圧制がつづいて
いた。(村川 堅太郎)

きりぎりす *Gampsocleis buergeri*

直し(翅)目キリギリス科に属するこん虫。
体長45mm内外、体色は緑色とかった色を混
じるが、緑色部の多い少ないは個体によ
って一定しない。また、はねも体長より
短い短翅型と長い長翅型とがあるが、後
者は少ない。触角は糸状で長く、後脚も
長く、著しく跳躍する。盛夏のころに出
現し、原野の草むらの中でチョン、ギ
ースと鳴く。昔から鳴く虫の一つとして大
衆に最も親しまれてきた種類で、かごに
入れて露店などで販売される。発音器は
前ばねの重なる部分にあり、そこをすり
合わせて鳴くが、雌は全く鳴かない。腹
端に長い産卵管がある。北海道を除く日
本各地に産するが、寒冷地のは小形で、
晩秋まで鳴くものがある。北海道には
よく似ているがはねが長く、緑色部の
多いハネナガキリギリス *G. ussuliensis*
を産する。(黒沢 良彦)

《万葉集》には今日のコオロギをコオロ
ギとよんだ歌が数首ある。当時のキリギ
リスは今日のキリギリスと同じであった。
《古今集》で今日のコオロギがキリギ
リスと誤ってよまれ、それが芭蕉の俳句ま
で続いた。今日のキリギリスが正しくキ
リギリスに訂正されたのは、一茶の俳句
や川柳の時代になってからである。

(古川 晴男)

キリクとうげ キリク峠 Kilik Pass
カラコラム山脈の北西端にあり、カシミ
ールと中国の新疆ウイグル自治区の境界
に位置する。標高4,755m。東方のミンタ
カ峠(4,703m)とともにインダス河谷から
ギルギットを経て、カシュガルに出る重
要な通商路上にあたり、アフガニスタン
領にも近い。(川喜田 二郎)

キリコ Giorgio de Chirico 1888～
1978 20世紀美術に大きな影響を与えた
画家。イタリア美術界の長老であった。
ギリシアのヴェローでイタリア人の鉄道技
師の子として生まれ、アテネの工芸学校
に通った。父の死後、1906年、母と、の
ちに作曲家になった弟アルベルト・サヴ
ィニオとともにミュンヘンにゆき、同地
の美術学校にはいった。ミュンヘンでは、
とくにM.クリンガーの幻想絵画とニーチ
ェの哲学思想の影響をうけた。1909年イ
タリアに帰り、11年から15年までパリに
滞在。この間には、《永遠の郷愁》(1911、
ニューヨーク近代美術館)、多くの《イタ
リアの広場》のような作品を発表、アポ
リネールなどの批評家に激賞された。そ
れらの作品は、実際にはない仕方人間や
事物が組み合わされ、極端に幻想的な線
的遠近法の激しい明暗をうけ、冷たいが

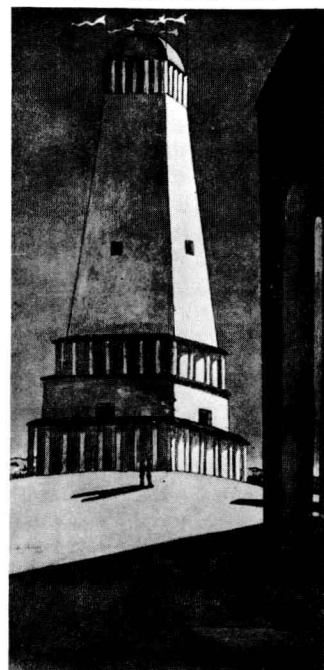
神秘的な色彩で塗られ、なぞのように不
安なふんい気を与えた。15年イタリアに
帰って兵役につき、フェララでカルロ・
カラと知りあい、〈スクオーラ・メタフィジ
カ〉(形而上派)の運動を起し、イタリア国
内のみでなく、世界各国、ことにシュル
レアリスムの運動に革命的な影響を与え
た。1919年以後、古典的伝統に復帰し、
タールベ、のちにラファエロに近づきな
がら、主として神話を主題とした写実主
義的な作品を発表していた。サヴィニオ
の《ニオベの死》(1926、ローマ)などの
舞台装置をしたこともある。第二次大戦
後、ローマに定住。(土方 定一)

きりこガラス 切子ガラス ⇨カット・
グラス

きりこどうろう 切子灯籠 盆灯籠の
一種で、角形灯籠のすみを切り落したよ
うな形状のもの。すみごとに造花を飾
り、紙片をたれ、下部には四方に白紙の
幡(はん)を張り下げて、それに透模様や
六字の名号などを入れることが多い。盆
の精霊祭に灯籠を点ずる風習は文献の上
でも鎌倉時代までさかのぼりうるが、切
子灯籠は早くからそのためにもっぱら用
いられたらしく、《円光大師絵伝》など
にもこの形のものが見えている。江戸時
代にはいと庶民の間ではしだいに盆提
灯(ぼんちようちん)におきかえられるよ
うになったが、武家や寺院ではなお切子
灯籠が用いられていた。吉原の玉菊灯籠
行事などにも、華美な意匠の切子灯籠が
他の形のものとならんで飾られたという。
なお、諸地方の念仏舞踊などにも、この
古風な切子灯籠がしばしば用いられてい
る。丸形提灯の創案以前に、とくにこう
した形状の灯籠がもっぱら魂祭(たままつ
り)用にあてられたのには信仰上の原因
があったと推測される。(竹内 利美)

きりこみたん 切込炭 採掘した石炭
を、選炭も、ふるい分けもせず、その

キリコ《永遠の郷愁》1911



まま商品として市場に出すもの。したがって塊炭も粉炭も混合した状態で、多くは〈ばた〉も混入しているから、一般に低品位で価格も安い。近時、選炭の過程を経た石炭を塊粉混合のまま切込炭の名で販売することがあるが、この場合には前者を〈未選切込〉、後者を〈商品切込〉と名づけて区別する。（今泉 常正）

きりさげ 切下 切髪(きりかみ)ともいう。婦人の結髪の一つで、未亡人が結った。封建社会では婦人は年齢、身分、職業に応じ、また冠婚葬祭などの場合に髪をかえる風習があった。切下げは未亡人であることをあらわす意味の髪で、中国では古くから夫に死別すると操をたてる意味から切髪が行われ、日本にもこの風が移入され、さらに夫の死後の幸福を祈る意味から仏門に帰依し、髷(まげ)の根もとからすこし上で毛を切り落し、残った短い毛をたばね元結で結んだ上を紫の八打(やっうち)のみで結んだ。謡曲《墨染桜》や《新続古今集》にこの切下げのことがみえているのが、文献として古い例であろう。江戸時代には、諸侯の後室をはじめ旗本の妻、民間では中くらいまでの家庭で行われたが、それ以下には普及しなかった。明治・大正になってはまだ切下げの風習が一部にみられたが、その後洋髪の普及と新しい時代の影響を受けて急速にすたれた。（遠藤 武）

ギリシア ギリシア語ではヘラスHellasあるいはエラスEllas、ラテン語ではグラエキアGraecia、英語ではグリースGreeceという。〈希臘〉という文字はヘラスの漢訳で、日本ではギリシアのあて字として用いられた。ヨーロッパ南東部にある共和国で、正式な国名はギリシア共和国Elliniki Demokratia。面積131,944 km²。人口8,768,640(1971調)、人口密度66人/km²。首都はアテネ。

【自然】東地中海に突出するバルカン半島の南端にあり、半島状の本土と周囲に散在する大小多数の島々から成る。本土の西岸はイオニア海、東および北東岸はエゲ海に開かれている。北部は延長800 kmの長い国境によって、アルバニア、ユーゴスラヴィア、ブルガリアに接し、東部はマリーツァ(エヴロス)川をへだててトルコに接している。本土そのものが入江、岬、小半島をいたるところにもつ半島であるため面積に比して海岸線が長く、国土全面積の約4分の1に相当する多数の島があり、バルカン半島の中央部から南に延びる第三紀褶(しゅう)曲山地は、ギリシアにはいってピンドス山脈となり、国土を南北走してペロポネソスにいたり、いったん海におちいり、方向を変えてクレタ島につづいている。ピンドスは東西に支脈を分岐して、ギリシアを山の多い国土としている。ギリシア最高の山オリュンポス(2,917m)はピンドスの脊梁(せきりょう)山地から東に延びる支脈上にある。これら小山脈が国土を縦横に走り、地形を細分し、いたるところ周囲から隔絶した山間盆地・小河谷を形成する。この盆地・河谷には早い時代から地域社会が生まれ、これらが後に発展して、アテネ、スパルタなどの都市国家となった。ギリシアの山地は主として石灰岩から成

気 候 表		ア テ ネ (37°58'N:23°43'E 標高107m)											(理科年表1970による)	
	月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	全年
気 温(℃)		9.3	9.9	11.3	15.3	20.0	24.6	27.6	27.4	23.5	19.0	14.7	11.0	17.8
降水量(mm)		62	36	38	23	23	14	6	7	15	51	56	71	402

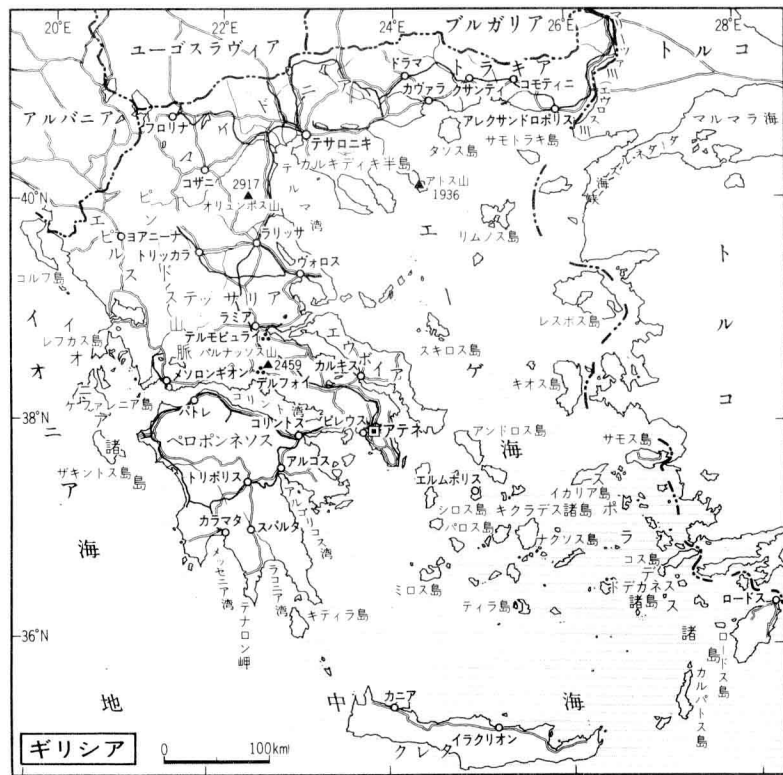
テサロニキ (40°31'N:22°58'E 標高4 m)														
	月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	全年
気 温(℃)		5.5	7.1	9.6	14.5	19.6	24.7	27.3	26.8	22.5	17.1	12.0	7.5	16.1
降水量(mm)		44	34	35	36	40	33	20	14	28	55	56	54	449

り、アテネの中央にそびえるアクロポリスをはじめ、頂上に神殿の祭られた多くの丘は白い地はだを露出する石灰岩丘陵であった。神殿建築の素材となった大理石もこれら山地から切り出された。平野はトラキア、マケドニア、テッサリアをのぞいて見るべきものがない。海岸低地の一部には沼沢地が見られ、マラリアの温床となる。この熱病は古来ギリシア人を悩ませたが、現在も住民とマラリアとの戦いはつづいている。気候は北部の山地をのぞき、典型的な地中海式で、冬も溫和である。全土が冬雨型で、北部とイオニア海斜面には年間かなりの雨量がある。しかし中部ギリシア以南は夏の乾燥がはなはだしく、川の水はかれ、農耕にはかんがいが必要とする。またエテシアイ(北風)、シロッコ(南風)などの地方風が住民の生活に影響を与える。

【住民】住民の大部分は、大西洋・地中海型人種として分類される純粋のギリシア人で、このほか西部と北部には少数のアルバニア人、ブルガリア人が居住する。現在のギリシア人は、人種的・文化的に古代ギリシア人とははるかにへだたり、その直接の子孫とはみなしがたい。その用いる言語も古典時代のギリシア語とは縁遠い近代ギリシア語である。住民の96%がギリシア正教を奉じ、イスラム教、ユダヤ教、ローマ・カトリック教も一部に行われる。ギリシアの人口は多くないが、

資源が乏しいため、相対的に人口過剰となり、ことに第一次世界大戦後、トルコから約200万のギリシア移民が帰還し、同時にギリシアを去った80万のトルコ人と相殺してもなお100万以上が急増し、人口問題はいつそう切実となった。これら引揚者はマケドニア、トラキアなどに定住して未開墾地の開拓にあたったが、都市に流入して工業に従事する者も多かった。人口対策としては移民その他の方策がとられている。（辻田 右左男）

【政治・外交】1946年に復活したギリシア王国は立憲君主制であって、政治の中心は古代の評議会buleの名をとった議会(国会)vouliである。1911年憲法を51年に改正して52年に発効した憲法は、信教の自由をみとめながらも、ギリシア正教を国教とすることが規定されており、国王はギリシア正教の信仰をもつことを宣言しなければならない。国王は元首であり、軍の統帥権、宣戦や条約締結の権限をもっていた。51年の憲法改定のおもな点は、土地のない農民に対する土地分配のために一定の土地買上げを容易にするような措置が規定されたこと、公務員または公共企業体の職員はストライキ権を奪われ、現存秩序転覆の思想は公務員たることと相いれないと宣言されたことなどである。国会は一院で任期4年の300名の議員よりなる。議員選挙は全有権者の普通選挙により、比例代表制を採用し



ている。52年5月21歳以上の婦人にも選挙権が、また25歳以上の婦人にも被選挙権が与えられた。しかし、67年のクーデタ後にこの憲法は停止され、68年に王権を大幅に制限した新憲法が、国民投票で圧倒的支持を得て成立した。

1952年7月、内戦において共産主義者の討伐によって名をあげたババゴス元帥(1883～1955)が新党を結成して11月の総選挙に勝ち内閣を組織した。1953年以後キプロス問題が国内政治にも影響を与えはじめ、キプロスのギリシア復帰はギリシアの国民的念願となった。政党はフランスのように多数の政党があったが、しだいに統合・連合が進み、二大政党として、右翼の国民急進党(ERE)および中央党または中央諸派連合(EK)、第3党として1947年以来非合法化されている共産党にかわって結成された左翼民主連合(EDK、PAMEともよばれる)、それに少数の進歩党が組織された。55年10月ババゴスが死ぬと、コンスタンティノス・カラマンリス(1907～)がその後継者として組閣し、56年1月の総選挙では、新たに結成された国民急進党が過半数を制して、カラマンリスが首相となった。カラマンリス内閣は、内戦後の復興を着実に実行し、58年5月の総選挙でも、国民急進党が第1党となって国民の支持を得たが、このとき左翼民主連合が前回の18議席から一挙に78議席をとり、内閣に対する国民の不信が高まってきたことを明らかにした。59年キプロスは独立して、独立運動の指導者マカリオスが大統領に就任して、ギリシアの対英関係は好転したかにみえた。しかし63年4月訪英中の王妃フレデリカ一行がロンドンで群衆に乱暴される事件が起り、6月カラマンリスは予定された国王の訪英に反対して辞任した。63年11月の総選挙では、中央連合が138議席を得て第1党となり、国民急進党は132、左翼民主連合は28、進歩党は2議席を獲得した。この結果中央連合の指導者ゲオルゴス・パパンドレウ(1888～1968)が組閣したが、第1党とはいえ過半数を制することができず、政情は安定を欠き、12月辞任した。64年2月総選挙が行われ、中央連合が過半数を制して第1党となり、第2次パパンドレウ内閣が成立した。中央連合は、61年の総選挙のときに結成され、パパンドレウの指導する民主中央農民自由連合、ヴェネゼロスの指導する自由党のほか民主連合、

農民党などを含み、その結束は必ずしも強固ではなかった。64年国王パヴロス1世が没し、コンスタンティノス2世が即位したが、65年7月パパンドレウ首相が国王から解任されて以後、政情不安が続いた。67年4月、軍部クーデタによってパパドプロス George Papadopoulos の軍事政権が成立した。同年7月、国王は逆クーデタに失敗してイタリアに亡命した。憲法と政党活動は停止され、議会も解散されたが、68年軍事政権の手で新憲法が制定され、70年ころから政党活動に対する規制は少しずつ緩和され、73年6月には正式に王政が廃止され共和制へと移行した。

ギリシアはバルカン半島で唯一の西側陣営の国で、北大西洋条約機構(NATO)の加盟国であり、アメリカの軍事援助のもとに陸海空軍を整備し、国防省が統轄している。外交面では、キプロスをめぐってトルコと長らく紛争が続いている。

【経済・産業】全国土の約4%が島々であり、全国土にわたって山地が多く、しかも山はだいてい石のはだをあらわにしたはげ山で、可耕地は全国土の約4%にすぎない。全人口約877万のうち約4%はアテネおよびその外港ピレウスとその近郊に集中し、アテネ、テサロニキ、パトラスなどの近代都市があるが、資本主義はひじょうに遅れており、労働人口の約半数は農民、約4%は商工業者で、工場労働者は約1割にすぎない。アテネは美しい近代都市で、世界の観光客を招いているが、全体としてみればギリシアは貧しい農業国であるといえてよい。しかし可耕地が少ないうえに、乾燥した地中海性気候のゆえに地味はやせており、小麦や大麦は自給するに足らず、肉類とともに大量の穀物を輸入しなければならない。しかし石灰岩質の土壌は水はけがよく、果樹栽培には適しており、オリーブ、ブドウ、イチジクなど古代以来盛んに栽培され、オレンジ、レモン、アーモンドなども産出される。北ギリシアおよび北西ギリシアではタバコと綿花の栽培が盛んで、タバコの輸出は全輸出額の25%に達する。ブドウ、干しブドウ、干しイチジク、綿花、オリーブ、オリーブ油、オレンジ、レモンなども輸出される。牧畜は羊、ヤギなどの小形家畜が多く、北西ギリシアには羊やヤギの大群をつれて草を追い歩く牧人が見られ、また羊毛紡ぎの百姓女の姿は農村の伝統的生活様式と生産方法

の古さを象徴している。ビザンティン時代に盛んだった養蚕業、絹織物業はすたれたが、ペロポネソス半島のカラマタ(カラム)の尼僧院には古風な機械を使った絹織物を産するものがある。国土の約15%を占める森林は乾燥した風土と乱伐のために荒廃しているが、北部ギリシアやタソス島はかなり良質の松やイトスギを産する。ペンテリコン(今日のペンデリ)の大理石やラウレイオン(今日のラヴリオン)の銀、パンガイオンの金など古代において有名だった鉱山はすたれたが、タソス島の鉄は今日重要な特産物となっている。輸出される鉱産物には、セメント、鉄、ボーキサイト、鉛、大理石などがある。このようにギリシアは近代産業の遅れた国であるため、多くの工業製品を先進資本主義諸国に仰がねばならず、イタリア、西ドイツ、アメリカ、フランス、イギリスからの輸入が多く、この数年間の国際貿易の収支状況は、輸入が輸出の3倍を超えるありさまである。したがって観光客の誘致は国策の一つであり、年間約100万の観光客が訪す金額は1億2,000万ドルにのぼる。通貨はドラクマで為替レートは30ドラクマが1米ドルである。海運は世界有数の船舶保有国であり盛んであるが、陸上交通は未発達で、鉄道はテサロニキ、アテネ、オリュンピアを結ぶ幹線と若干の支線に限られている。しかしバスはよく発達し、道路も近年舗装が進んでいる。アテネを中心として、テサロニキ、カヴァラ、コルフ、リムノス、ミュティエネ、ロードス、クレタなどには航空路が開けている。

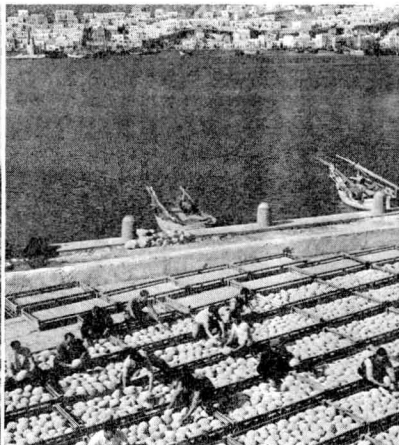
【社会・文化】総人口の約4%が首都アテネおよびその近郊に集中していることは、都市と農村の生活水準のアンバランスを象徴するものである。テサロニキは約35万、パトラスは約11万の人口をもつが、その他の都市はすべて数万以下のいなな町にすぎない。国土の貧困は人口収容能力を限定し、ために南北アメリカやオーストラリアなどへの移民が多い。のみならず近代産業の未発達によって農村人口を労働者として吸収する能力が小さく、ことに婦人の職場は銀行、航空会社、観光案内所や少数の皮革工場などに限られている。貧困は国民の教育水準の低いことにも表現され、6歳から12歳までの6年間の義務教育は普及しつつあるとはいえ、1971年現在まだ15%(15歳以上の)が文盲である。公私立の小学校は約9,700、ギムナシオン(中等学校)は約1,000である。若干の専門学校のほか大学としてはアテネ大学、テサロニキ大学など5校ある。

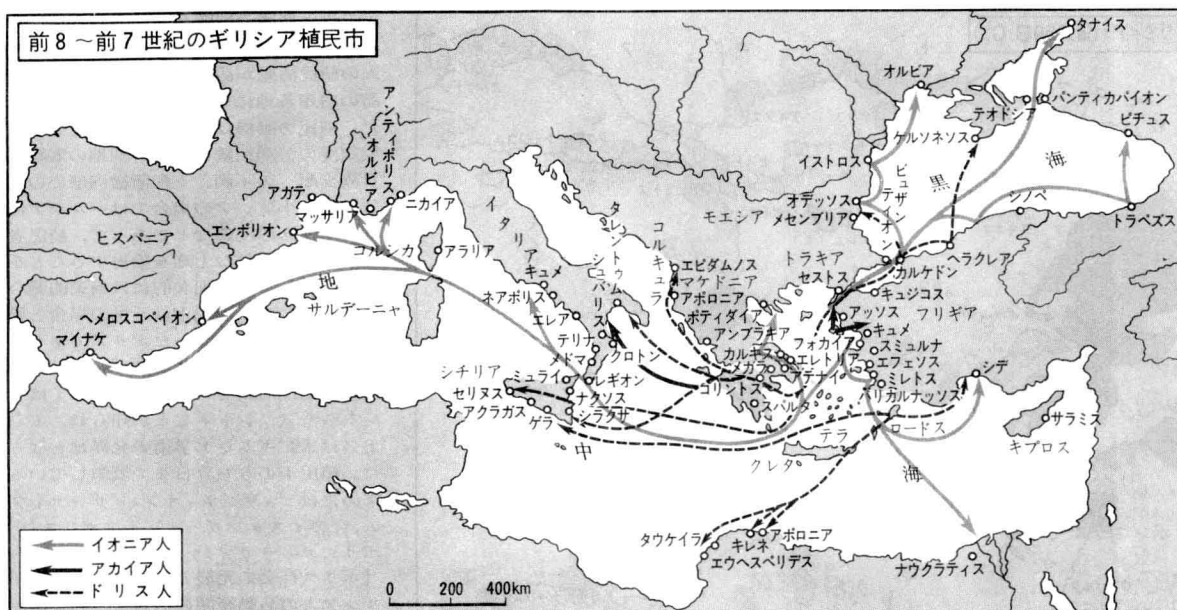
宗教はギリシア正教が主流をなし、住民の大部分は正教信者で、プロテスタントは約15,000、イスラム教徒は約10万(モスクは約300)、カトリックは約4万にすぎない。1968年の憲法でも信教の自由が確認されたが、国王は正教の信者でなければならないなど、種々の制限がある。聖山とよばれる女人禁制のアトスの岬全域が、20の修道院より成る共和自治体として特許状を与えられていることも特色である。

労働運動は農民組合や労働組合を中心としており、その中心地はピレウス、ヴェネゼロ、パトラスなどの港町である。

独立後のギリシアでは一時新古典主義

ギリシア 左はテサロニキのブドウとオリーブの農園。右はアテネの外港ピレウスで、同港からはスポンジも盛んに輸出される





が盛んであったが、思想界に著名な人は出ていない。現在の学問・文化は、だいたい西ヨーロッパのそれを受け入れたものであり、古代ギリシア語やギリシア史の研究を志す人は、イギリス、フランス、ドイツなどに留学するのがならわしとなっている。この点でギリシアは、ヨーロッパの東端にあってつねに西方に目を注いでいる国だといえる。映画、演劇、音楽も盛んで、古典劇の俳優はイギリスのシェークスピア劇俳優のように著名であり、ソプラノ歌手マリア・カラスは世界的に知られている。映画『日曜はだめよ』(1960)の主題歌を作曲して有名になったハジザキスは、ギリシア的生活の哀愁をたたえた曲によって民衆に愛されている。文学としては戦争中のレジスタンスをテーマとしたベラテス作の『広い河』やマクロプロス作の『血の山々』などが名高い。1963年ノーベル文学賞を受けたゲオルギオス・セフェリス(1900～71)の叙情詩には、『日記』(1941～45)や『キプロス』(1956)などがある。民衆は一般に民謡を好み、農民の間に伝わる地方色豊かな民族舞踊は、ピレウスの劇場で観光客にも紹介される。(太田 秀通)

歴史

【序説——世界史における古代ギリシア】

紀元前2000年ころ印欧語族の一派がヘラスの地に南下してそこにいわゆるギリシア世界の成立を見てから現代にいたるまでを通じて、ギリシアが世界史的に最も重要な意義をもつのは、前7世紀から前4世紀末までのポリス社会隆盛の時代である。このポリス社会の特色は、自由な市民団の形成ならびに民主政の発展、私的奴隷所有の展開、自由な思考と現世肯定にもとづく高度の文化の発達などの点に求められる。そしてこの特徴的な政治形態や階級関係の基底として、市民の世襲的私有地(クレロス)の存在が目される。クレロスは本来「くじ」を意味し、原始の共同体がその総有地を「くじびき」で分配したことから起ったと推定され、このような共同体的総有の原理に媒介されて私的土地所有が発展をとげたという

ことは、全国土王有の原理の実現をみたオリエントの古代社会の場合とすこぶる対照的である。しかし相互の対照はいちじるしいとしても、この古典ギリシアの社会とアジア諸地域の古代社会との間には、なおかつ古代社会としての発展ということにおいて共通するものがあることが注意されなければならない。すなわち原始社会から古代社会への発展に際しては、双方とも大差のない氏族制的共同体から出発したと考えられる。そこからいかにして異なる経過が生じたかという問題の解明が世界史的な課題となるが、氏族の長である王が一方の場合においては共同体成員を臣民とする専制君主となったのに対し、ギリシアの場合は王の支配がやがて貴族支配によって打倒され、クレロスを基盤とする市民共同体の形成が妨げられなかったというところに分岐の要点が指摘される。この分岐の由来については、以下のような事情をあげることができよう。(1)ギリシア史の開始に際しては、すでにかなり発達した先進文明に接触することができたこと(フェニキア人の仲介貿易によるなど)。(2)国土および地中海の地理的条件により、ギリシア人は土地所有・農牧を基軸とする経済生活を送りつつ、早くから商業活動をおこなったこと。(3)オリエントのかんが農社会のように水の統制によって広い地域を統一する専制君主や特権的な官僚・神官の支配が生まれることなく、氏族・部族制小集団が自然の狭い地域ごとに連合してポリス(国家)を形成したこと。(村川 堅太郎)

【先史文化とギリシア人の来住】ギリシアにおける文化は新石器文化から始まるが、その中心はテッサリアにあった。ことにディミニ文化(テッサリア第2期)になると、城壁をささぎ原始メガロン型の家が現われ、その土器は赤、白などで多彩な文様をほどこしている。しかしこのころ(ca. 3000B.C.)テッサリア以南には金属文化が始まり、これまでの農牧を主とする生活からエーゲ海の生活に入ると、海岸や交通路に集住し、土器も変化するが、城壁はなかった。以上の諸文化のに

ない手はどこから来たか、まだ不明であるが、前2000年ころに新しい民族が北方からバルカン半島を南下して来住した。これはたしかにアーリヤ人であり、ギリシア人である。ギリシア人はその方言の差によって東方言群(アイオリス人、アルカディア人、イオニア人など)と西方方言群(ドリス人と北西方言群の人々)に大別されるが、この北方からの来住民族はそのうちの前者に属する。彼らの土器は無装飾だが、轆轤(ろくろ)を使ったもので、ミニュアス土器とよばれる。彼らはしだいに海上に進出して先住民の文明を採用し、前1600年ころからミュケナイ、ティリンスを中心にいわゆるミュケナイ文明時代をつくった。このミュケナイ時代の歴史は、イギリスのヴェントリス、チャドウィックらによるミノア線状文字Bの解読(1952)や、ウェース、プレーゲンらの考古学者の発掘と研究によって書き改められつつある。今日ではクレタの最盛期とされている前15世紀には、その首都クノッソスの主はミュケナイ人であり、『宮殿式』とよばれる陶器は彼らの所産とされる。そして彼らは東地中海の海上権、交易権を握っていた。しかしこの時代のギリシアは統一国家をなさず、ミュケナイ、ピュロス、オルコメノス、その他の諸国があって、王は堅固な巨石でぎざいた城塞(じょうさい)、壁面に飾った宮殿、大なる穹窿(きゅうりゅう)トス)墓などをつくった。クノッソス、ピュロスから出土した線状文字Bを記した数千の粘土板は、これらのギリシア人の記録であった。その社会については上述の文書と考古資料とこの時代を歌ったホメロスの叙事詩とを結合することによって推論や仮説が出されたにすぎず、文書解読後すでに10年以上を経ているが確実にわかったことはなほはなほ乏しい。文書は行政、財政、祭祀(さいし)に関する王の役人の記録で外交や歴史の記録はないが、文書から推せばピュロスでもクノッソスでも、王宮の役人、書記が課税、賦役徴募、生産物の配給などを厳重に管理していた社会であり、オリエントの古い都市国家に通じるところがある。ギリ